

19-584

學

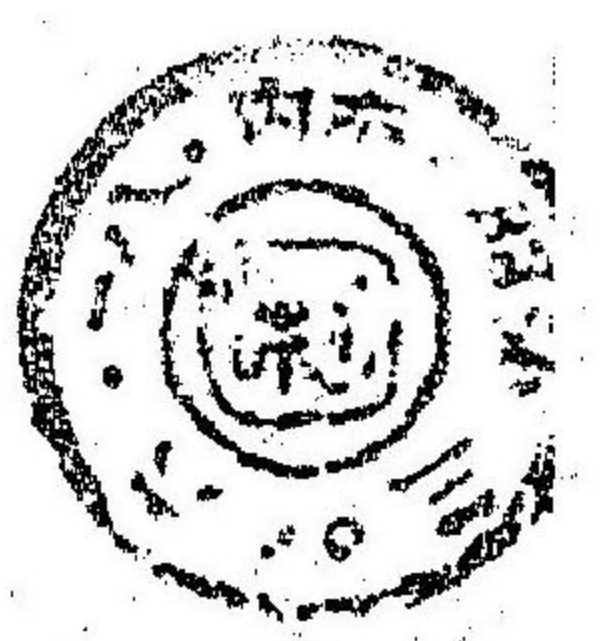
19-584

日



中嶋筑山著

本文記評釋全



東京文章專修會

一本書は、専ら中學の程度を本として、解釋と修辭との上より、説き明かせるものなり。

一國文の解釋の多きことは、斗にて量かり、箒にて掃はむばかりなれど、修辭的眼光を放ちて觀察したるものとは、晨天の星と一般。絶えて無くして、僅かに有るものは、萩原廣道の源氏物語評釋なりけり。これさへ初めの巻のみにて、終局を見ず。文學上歎はしき限りならずや。おのれ、自ら力のほどを掃らねど、國文のかすくを、つきくに修辭的に説き明かさむ。

一修辭は、字句の上にかゝるは、言ふまでもなく、主として、全篇の大主意を説き明さむが爲めなり。全篇の大主意を説き明かさむは、その人物の品格は如何、その人物の所思は如何、その人物と其の時代との關係は如何、深くこれらを研究せむが爲めなり。全くその著作の隱微を看破せむが爲めなり。徒らに彫琢にのみ、眩まされて、骨董的に玩弄せむとはあらず。

- 一 解釋は、勉めて正確にして公平なるものを取り、修辭は文の前後に着目して、全篇の大主意を失はざらむことを主とせり。
- 一 この方丈記は、國文中、最も平易明快なるものなれば、今日の普通文として、は、その範を、こゝに取らざるべからず。これこの評釋を、この方丈記より始めし所以なり。
- 一 この篇は、大主意の在る所を窮めむ爲めに、その意味の切れ目に、符調を付したり。

、……………讀

○……………句

—……………節

┌……………小段

└……………大段

又た筆づかひの妙處には、

、、、、、、、

大主意と關係したる處には、

○○○○○○○

文線の貫申したる處には、

●●●●●●●●

大主意の在る處には、

◎◎◎◎◎◎◎

さる程に、その説明どうの符調とを對照せむには、その文の妙處、佳處、併せて大主意の所在をも、認め得られなむか。

一 おのれ、志は常に進みて前に在れど、力は遙かに遅れて、まりへに在り。この書に於いても、極めて誤謬杜撰の所も多からむ。大方の諸君子、幸に誤謬を正し、杜撰を改めてよ。あはれ斯の文の爲めに、將た斯の道の爲めに。

明治廿九年八月

幕天席地慮に

筑 山 志 る ず

方丈記評釋の序

方丈記評釋の序

文を解くに二つの道あり。事のことゝるを、こまやかに説きて、讀む人をして惑なからしむるもの、これ一つ。全篇をおしわたして、その組織に説きおよぼし、讀む人をして深く味はしむるもの、これ一つ。この二つの道をかねて解きたるを、まことの文の解とはいふべき。これを畫に譬へむに、こゝに花見の圖あらむ。その木はいと老いて苔むし、その花は白くしてやゝ紅を帯び、人は男女打まじりて、かしの巖のもとには小袖幕引はへ、こゝの木の下には青蘘を敷きつめ、あるは謠ひ、あるは舞ふさまの、おもしろからむも、たゞそのさまを打見たらむよりも、何故にこゝには

幕打はへたるか、いかなればかしこには、莖張りたるか、舞  
 ふ人の手つき足つきはいかに、謠ふものゝ口つき、衣の色  
 はたいかになど、その畫工の心にかはりて、考へ見てこそ、  
 始めてこの圖の巧拙も知り得べけれ。昔よりこの二つの  
 道をかねたる文のときことは、萩原廣道の源氏物語評釋  
 をもて第一とすべきか。近きころ文の道ひらけぬれど、大  
 かたはその研究のたゞに解釋もしくは考証にのみ走り  
 て、その書きぬしのことろをくみて、味ひ出るもの少きは、  
 いとあやしきことなり。こゝに學友中島幹事君のものせ  
 られし、方丈記の評釋は、おのが常におもへる心と打合ひ  
 て、いとうれしくも、めづらしくも、ときなされたり。されば

この序乞はるゝに、いかで辭むことを得む。おのれは君が  
 公務の餘暇に、かゝる著述にいたつかれしことを、この道  
 の爲によることと共々、この筆つきにて、源氏枕草紙をば  
 じめとして、あらゆる國文の書類をも、評釋せられむこと  
 を望むものなり。こを讀む世の人々も、また志か思ふや、あ  
 らずや。

明治廿九年九月

小中村義象

方丈記評釋

筑山 中島幹事評釋

作者と文章との關係

作者と文章との關係

方丈記は鴨長明の手に成れり。凡そ文章といふものは、作者の精神によりて形造らるるものなれば、長明の人物は大抵方丈記の文によりて窺ひ知らるべし。蓋し長明は厭世的の人物なり。この厭世的思想は、その心意が常に過敏過捷にして、いつも偏傾的に發動したる結果なるべし。その故いかにと問はば、請ふ長明の一身に關する歴史の上にて之れを證據立てなむ。

按ずるに、鴨長明は通稱を菊太夫といひて、山城國賀茂の社の氏人なり。生死の年月は定かに知り難けれども、その生存の間は、旭日昇天の勢ある平家の世盛りより、その榮華の夢覺めて、源氏の世となりにし頃まで

なりしことは確實なるか如し。父なる人を長繼といひて、代々賀茂の社の稱宜なりき。長明父祖の業を繼いで社務職に補せられむことを、公に請へど、許されざりしかば、やがて憤悶して、この世を遁れ出でしき。かくて蓮胤と稱へて洛外なる大原の野に隠れにし時に、この方丈記は作られたり。

抑、社務職は父祖の業とはいへ、普通の眼光を以て觀れば、設令ひろの事叶はざればとて、忽ち飄然と、この世を見捨て、山野に隱遁せむとまで決心するほどのことにもあらざるべし。ざるに、長明の心頭には、獨りろの事柄が宛も火薬庫の一時に爆發し來らむが如く、忽ち滿腔の感情を傾け盡くして、一刹那の間に、この世の見きりをつけてけり。これを思ひきりのよき者とこういはいへ、過敏過捷の感情が偏傾的に發動したるものならずば、いかでかろの思ひ切りをして能く此に至らしむることを得む。これをしも、極端より極端に馳せ、凡夫の骨頂より非凡夫の

骨頂に飛び移りたるものといはずば、いづれをかしかいふべきものやある。厭世的感情を引き起すものゝ多くは、この寸法に出でざるはなし。かの文覺上人の遁世の如きも、引き出て、此の例となしつべし。もつとも長明が厭世的思想を馴致したるは唯たこの一事件にのみ由りたるにもあらざるへし。ろはさしも驕りに驕りを極めつる、平家が忽ち一の谷の旗風に吹き飛ばされて西海の藻屑と消ぬにしさまなどを、目前に見聞したるが如きも、長明が世をはかなみたる要因たるには相違なし。この外にも猶ほ種々錯雜なる原因ありしや明らけし。されど、どこにもかくにも、この一事件が導火線となりて、他の遠因をば一時に爆發し來りしことは疑ふべし。もあらず。

さて又たこゝに文學者と世間との關係を吟味して、然る後に長明と世間とが如何なる關係を有したるか、之れを研究すべし。文學者と世間との關係に二あり。世間と出世間との二大別これなり。

第一 世間

世間とはこの世俗といふものと終始相離れずして、互に相能く世と浮沈推移するものをいふ。この世間の中に、通と憤との二小別あり。

(一) 通

通は終始世と能く相容れて、その事情に通達したるものなり。世の粹を抜き、人情の微を穿ちたる院本小説の作者の如きは、多くはこれに屬し、異林子の如き、馬琴の如き、その他、西鶴、春水の徒の如きは、此種の人物なり。

(二) 憤

憤は世と終始相容れずして、能く世間の短處缺處を摘發攻撃して、その不平を漏すものなり。漢文にては屈原の離騷、和文にては平賀源内の院本に於けるが如き、この例とするに足れり。

第二 出世間

出世間とはこの世俗と終始相離れて、風塵の外に超然たるものをいふ。この出世間の中に、諷、玩、厭の三小別あり。

(一) 諷

諷はおのれ自ら世俗の外に立ちて、その短處缺處のかすくを摘發し、それを醫療せむとて、諷刺譏諭するものをいふ。漢文にては詩經の或る部分、和文にては竹取物語の如き、馬琴の夢想兵衛物語の如きものなり。

(二) 玩

玩はおのれ自ら世俗の外に立ちて、その短處缺處のかすくをば一團として、之れを嘲笑玩弄するものなり。太田南畝の狂文狂詩に於ける、十返舎一九の膝栗毛に於けるが如きものなり。

(三) 厭

厭はおのれ自ら世俗の外に脱離して、その短處缺處のかすくを見て、それ汚染せらるるを厭ふて、世を遁れ出でたるものなり。さては、長明



この人は此の種の人物にて、方丈記の文は實にこの種の文章なりとす。かくてこの方丈記の歴世的思想が、いかなる材料によりて組み立てられるか。うはつきくに論究してもてゆかば明瞭ならむ。

六

### 方丈記の文體

#### 第一 全篇の結構

この方丈記の全篇の結構は、全く漢文の骨組を學びたるものなるべし。かくてその氣脈は全篇に貫通して首尾呼應し、精神現活す。或人はこれを日記と隨筆とをかねたるか。ことさきものなりといへども、余は決して志かあらざるを信するものなり。うの故いかにとなれば、凡そ日記體といひ、隨筆體といふは、時間と場處とによりて、事に觸れ物に應じて、思ふがまに、筆を執るものなれば、前後の文章中に適、連続したるものもあれど、又は全く關係なきものもあるをこらういふべけれ。志かあるにこの方丈記は前後の文章、互に連続して、その排置の上にも自ら一定の順序

あれば、これが全篇の思想は作者豫しめ胸中に一定の考案を作りて、然る後に之れを筆頭に出現せしめたるものなるべければなり。要するに、これは一篇の遺世論ともいふべき議論文にて、一氣貫通して首尾呼應せり。中にはまゝ、叙事の筆法なきにあらねども、うは前後の議論を證據立つる爲めのものなれば、徹頭徹尾、一の氣脈を以て貫通する議論文と謂ひつべし。

さてこの文を分ちて三大段となす。起手の「行く川の流は絶えずして」といへるより「消えずといへどもゆふべを待つことなし」といへるまでを一大段とす。これは極めて短けれど、二大段の冒頭にて、世の無常なるさまに就きてうの大綱を論ず。凡そ物の心を知れりしより「といへるよりまばしもの身をやどし玉ゆらも心を慰むべき」といへるまでを二大段とす。この段には世の無常にして厭ふべく悲むべき事を、各別に事實を擧げて詳論す。我身父方の祖母の家を傳へて「といへるより、結尾の歌

までを三大段とす。この段は常住不變、安心立命の地を、この世の外に求めて、之れを唯だおのれの一心に歸着せしめて、その喜ぶべく樂むべきも、こゝに在るを叙す。かゝる文の結構法は、かの陶靖節の歸去來辭、蘇東坡の前赤壁賦を學びたるものゝ如し。歸去來辭は一大段に世事の日に非にして悲むに足れるを叙して、二段に世間を離れて他に樂むべき地あるを叙し、再び三大段には一大段の意をくりかへして人生の悲しむべき意に立ち戻りて、四大段に至りて、全く天命の二字を點出して、眞樂の地に歸着せしめたり。又た前赤壁賦の如きも、悲むべき意と樂むべき意とを把弄し來りて、遂には悲むべき意を反轉して、樂むべき意に歸着せしめたり。さては方丈記の組立の如きも、その大要、この二篇を學びたるものゝ如し。

第二 文の形体

この文の形体は、全く叙事と議論との二要素より成立せり。叙事の筆は

繁縷に流れずして、まかも能く事物の眞想を細密に寫し出して躍々如たらしめたり。議論の筆は自由自在に、意到り筆隨ひて、實に痒き處に手のとゞきたらむが如し。平易の中に奇矯を含めるは、例へば「頼めば身他の奴となり、人をはこくめば心恩愛につかはるといへるが如きにて知らるべく、又た明快の中に精采を失はざるは、二期の樂みはうたゝねの枕の上にはきはまり、生涯の望はをりくゝの美景にのこれり」といへるにても明かなるべし。もつとも多くの場合は對句をもて組立てられたる所ありて、少しく四六体の眞氣を脱せざるものなきにあらぬとも、は餘りしつこからずして、巧みにそれをつぎ合せて、その言語の使用法、即ち言語の撰擇、上の粹を抜き、言語の分量、上成るべくその無用なるものを省き、言語の排置、前後の關係よりその順序の宜きを得せしめたるものなれば、讀者には餘り四六併儷の感を起さしめざるは、いよいよめでたいや。さてこの文、議論が主となりて、叙事はこれを證據立つへ

き客たるに過ぎざれども、とにかく議論の筆も叙事の筆も、文の撰範とするに於いて餘りありと謂ふべし。且つ夫れ言語の撰擇上餘り古風にも流れず、俗偏にも陥ららず、平坦卑近にして最も時俗の耳に入り易ければ、普通文の撰範として最も妙なりと謂ひつべし。されどこの文の少しく議すべき點は前にもいへりし如く、全く四六体の文調にあり。且つ他の文を學ばむものは、多くはうの佳境妙處より入らずして、常にうの癖の在る所に感染し、易きものなれば、この文を學ばむにも必ずこゝに心して、うれに感染せられぬやう勉めざるべからず。

行く川の流は、絶えずして、去かももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまることがなし。一節流水と浮泡との比喩。これ下文を引き起す。

(解釋)よどみは、水のともまうて流れぬ處なり。○うたかたは、水の結びて形を成せるもの。水のあはとは、このことなり。○かつ消え、かつ結びての「か

つは、漢文の助字を引の儘用ゐたるものにて、同時同處に二つの事件の動作するさまを見はすものなり。史記の且引且戰といへるにて知るべし。水のあはが消るかと思へば結び、結ぶかと思へば消ゆるさまにて、同一の場處に消ゆると結ぶとの二つの事柄が最も密接せる時間内に動作することを見はせり。

(修辭法)このくだりの妙なるは、人生のはかなきさまを流水浮泡を假りて之れを寫し出し、に在り。凡る比喩法といふものは、他の感情を十二分に引き起さむとして使用するものなれば、他の感情を傷害せざる程度に於いて、誇張的に極端にいひなさいるを得ず。この流水浮泡の比喩は、全くこの理法を巧みに使用して、最も絶妙。されど流水浮泡を以て人生の無常なるさまに比し來れるは、獨りこの文のみかは、古文にも多く見ゆる所なれば、たゞこの比喩ばかりが長明獨得の妙處とはいはれじ。されば、この比喩を文字の上に見はして、が、其、想、を、活、現、せ、し、め、た、る、が、長、明、獨、得、の、妙、處、なり。

比喩の眞想と文章の音調とを契合せしめて流るる水浮べる泡を眞に紙上に活現せしめたるが長明獨得の長技なり。うの故いかにとなれば流水の比喩はうの音調をして輾轉流麗少しも滞る所なく宛も流水の溶々たるが如くならしめ浮泡の比喩はうの音調をして一凸一回浮泡の或は結び或は消ゆるが如くならしめたり。うは流水の文は僅かに三讀にして三讀ともに長くゆるやかにして、まかも假名音の性質上弱くてのびて靜かなるもの、即ち「の」の助字を始めとして多くこれらのものを使用したるものから、いかにも水の靜かになめらかに流れゆきぬるを見はせり。浮泡の文は四讀にてうの第二と第三との讀は極めて短くて、まかもうの間に同一の助字の「かつ」といへるを用ゐたるが爲め、浮泡の消えては結び結びては復た消ゆる同一の形狀を幾回となくくりかへす様子を活現せしめたり。且つ假名音の性質上少しく強くてつまりて急なるものを使用したるものから、いかにも浮泡の瞬間に或は消え或は結びて、軽く變化するさまを見はせり。

第一 大 段

第一の流水の比喩は、人生の變化無窮のさまを説きつれど、大體の上よりぼんやりと言ひ見はしたれば、人生のほかなきさまは、未だ辭の表面には見はれず、第二の浮泡の比喩は、一步を進めて直に無常の極を説きつれば、僅かに一讀すれば、いかにも人生のわはれほかなきさまを觀して、この世の頼みかたなき心地を、これ文の一步は、一步よりも進みゆき、一層は一層よりも深くなりまされるものといふべし。人の感情を十二分に引き起さむには、かゝる秩序を踏まざるを得ず。是に於いてか、思想の排置といふものは、修辭上最も重きを置かざるを得ざるものなることを知りぬべし。

世の中に。ある人。と。住み家。と。又。た。此。の。如。し。二。節。上。の。比。喩。を。承。け。正。意。に。引。き。入。れ。て。下。文。を。起。す。以。上。一。小。段。流。水。浮。泡。の。比。喩。を。以。て。人。生。の。無。常。を。説。く。

(修辭法)前に比喩をおきて、無常の頼みがたなきさまを十二分に感動せしめて然るのち正意なる、人間と住家とに落しこみ、あつさりど之れを表出せしは、いともかしこき筆なりや。

これは、上を結び、下を起す處にて、上下の過渡なり。下段すべて人間と住家とを説きて、全篇を貫きたれば、これを全篇の文線といふ。

玉まきの都のうち、にむねをならべ、いらかを争へる、たかき、いやしき、人のすまひは、世々をへて盡きせぬものなれど、之れをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は、まれなり。あるは、大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。二節上の正意をうけて、住み家の無常なるを説く。

(解釋)玉まきの都玉をまきつめたらむが如き美麗の都なり。○むねは棟の字にて、屋背の木なり。○いらかは、豊の字にて、瓦をのする所をいふ。○つきせぬは、つきさざるなり。

第一 大 段

(修辭法)こゝは後段の火災震災などを叙せむ爲めの伏案法なり。こゝに伏案を設けて、その住家の無常なるを説きたるものから、後段に至りその火災等の災害ありて、その無常なるさま、身の毛もよだつむばかりなり。いかなる文にても、その互に背異若くは差異したる思想を對列せしむるときは、いと面白くて、いと人を感動せしめ易し。この文も、初めに、ゆく川の流れといひ、よどみに浮ぶうたかたといひて、互にその差異の思想をあげ、こゝには、たかきといひ、いやしきといひ、又た大家といひ、小家といひ、各、その差異の思想をわけたり。下段も全しければ、うは追々、説き明かすべし。すむ人も、これに全しといひて、下段に人を説くものから、こゝにその端緒を説きおけり。所謂上下過渡の處。

所もかはらず、人も多かれど、古見し人は、二三千人が中に、僅かにひとりふたりなり。朝に死し、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。二節上の正意をうけて、人の無常なるを

説く以上二小段正意にて住家と人との無常を説く。

〔解釋〕多かれどは多くあれとなりくわが約りてかとなりたるなり。○死しは字音なり。志といへば正くはたらくなり。

〔終辭法〕たい水の泡にぞ似たりけるといひて初段の比喩にかへりずれを結びとめていとよくままりあり。

知らず。生れ死ぬる人。いづ方より來たりて。いづかたへか去る。又た知らず。假りの宿。誰が爲めに心をなやまし何によりてか。目をよるこはしむる。一節上の人と住家とをうけて。人生窮極の疑問を説く。

〔解釋〕假りの宿はこの住家もと假りの物いかに矮屋陋居なればとて誰が爲めに心をなやませる。或はいかに金殿玉樓なればとていかなる譯でそれが目をよるこはしむるとなり。

〔修辭法〕倒句法とは文字の順當のおき處をかへてその辭を變化せしむる

をいひて漢文にその例多かれど國文にもその例なきしもあらず。うはここの生れ死ぬる人いかな方より來たりていかな方へか去るを知らずといひ又た假りの宿誰か爲めに心をなやまし何によりてか目をよるこはしむるを知らずといふべき處をいづれもうの句の上に知らずの文字をおきて之れを倒裝せしめたり。

第三大段にこの疑問を説きてこの人は安心立命を得るに在りこの家は身を容るゝ丈の小屋にて可なりといひて之れを解釋したり。さすればその爲めに設けたるこのくだりなれば讀まむ人輕々にな看過し給ひや

そのあるじとすみかど無常を争ひ去るさまいは朝がほの露に異ならずあるは露おちて花のこれり。のこるといへども朝日に枯れぬあるは花志ほみて露なほ消えず消えずといへども夕をまつことなし。二節更らに比喩を設け

て人と住家とを結ぶ以上三小段結束この三小段を合せて一大段議論に

て人生の無常を説いて、二段を引き起す。

(解釋)無常は荀子に趨舍無定謂之無常とありて、常住ならぬ變轉窮りなきさまをいふ。

方

(修辭法)こゝは結束の處ゆゑ前の比喩の外に、又た一の無常なる比喩を設けて、一大段のくゞりをつけたり。うの比喩は前のご目さきのかはりていと新奇に覺ゆ。輕妙。いはゞ朝がほの露に異ならずいひて、先つうの大意を説き、後ちにうれを細かに分拆して、いとあはれに説き來れり。うの露を人に比

丈

し、うの花を家に喩へて、うの辭に抑揚をつけて、讀まむ人をして、この世に生れて、この家に居て、殆ど忙然として自失せしむるに至れり。

記

生れといひ、死ぬるいひ、又た來たりてといひ、去るといひ、又た心をなやましといひ、目をよろこばしむるといひ、又た露おちてといひ、花のこれりといひ、又たのこるといひ、かれといひ、又たしほみてといひ、消えずといひ、又た消えずといひ、夕をまつことなじといひ、各、うの思想の差異、若くは背異

せるものを對列せしめたり。

凡そ物の心を知れりしより、四十あまりの春秋を送れる  
あひだに、世の不思議を見ること、やゝたびくになりぬ。

一小段、この二段の冒頭。

(解釋)物の心は、世俗にいふものこゝろなり。世の中の事ども、心にどめて知れるやうになりてなり。○春秋は一年をいふ。四時の意なれど、大要を提げたるなり。○不思議とは思懸けもなき、不意のことにて世の奇怪などといふ。

(修辭法)この全段は、不思議の文字に、胚胎せらるゝものにて、全段のすべての思想は、この文字より出づ。之れを、二段の字母といふ。かくてこの一小段が、二段を引き起すべき冒頭となれり。

さりぬる、安元三年四月廿八日かどよ。風烈しく吹きて、靜かならざりし夜、戌の時はかり、都のたつみより、火出で來

たりて、いぬるに至る。はてには、朱雀門、大極殿、大學寮、民部省まで移りて、一夜がほどに、塵灰となりにき。一節、火災の大綱をあぐ。

〔解釋〕安元三年は、高倉院在位九年にあたりて、この年八月に治承と改元せり。平家物語一の卷、源平盛衰記四の卷にも、この火災のこと見えてるの筆法、稍、相似たり。○戌の時はかりは、今の午後八時にて、はかりは頃なり。○たつみは異にて、東南の隅なり。○いぬるは、乾にて、西北の隅なり。○はてはは、終りにはの意なり。○朱雀門は、皇城の南門なり。○大極殿は、大禮行はせ給ふ處なり。○大學寮は、有位の人の子弟を就學せしむる學校にて、今の學習院なとの如し。○民部省は、國土の圖并びに戶籍なとの事をつかさどる處なり。

〔修辭法〕このくだりより敘事にて、讀まむ人、その筆つかひを心して、み給へかし。先づ火災の大綱をあげて、その大要を知らしめ、殊に風ふきすさみて

その畏るべきを言ひ、後節、慘極まり、苦極まる處を叙せむに十二分の力をもたせたり。一夜かほせに塵灰となりにき、聞くだにおろしく、身の毛もよ立たむばかりにて、その風力の猛烈なる、その火勢の甚烈なる、後節を讀まで十二分の想像を胸に浮べたり。

第 二 大 段

火本は、樋口富小路とかや。病人をやどせる、假りの屋より出て來りけるとなむ。吹きまよふ風に、どかく移りゆくほどに、あふぎをひろけたるが如く、すゑひろになりぬ。遠き家は煙にむせび、近きあたりは、一向ほのほを地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光りに映して、あまねく、紅なる中に、風に堪へず、吹き切られたる、ほのほ、飛ぶが如く、にして、一二町をこえつようつりゆく、そのうちの人、うつゝ心あらかや。或は煙にむせびて倒れふし、或は炎にまぐれて、忽ちに死にぬ。或は又た僅かに身一つから



くして逃れたれども、資財を取り出づるに及はず。七珍萬寶宛ながら灰燼となりにき。うの費いくそはくぞ。二節力を極めてうの慘狀を説く。

方 丈 記

〔解釋〕かやは疑ふ助辭なり。○假り屋は、かりに造れる家にて、昔京都に施樂院、悲田院などありて、病人を救助せし處なり。○とかく移りゆくは、あちこちに移りゆく心なり。○一向は、ひたすらとよみて、うの方へばかり向ひて、他をまじへぬをいふ。○うつし心は、現の心をいふ。この世にある心はせまじ、焦熱苦熱の地獄の底にある心地すめりとなり。○まぐれば、卷き轉るといふ略言にて、炎の爲めに、遁け道を失ふてなり。

〔修辭法〕初めは、うの火本を叙し、次に風の方位を叙し、次に火勢を叙して、風に堪へず吹きさられたる炎、飛ぶが如くにして、一二町をこぼつうつりゆくといひて、うの猛烈なるさま、目前にかいりて妙甚し。

火本よりすゑひろになりぬといへるまでは、單行にて進みたりしが、遠き

家はより地に吹きつけたりといへるまでは、對行なり。又たうれより單行となりて、あるは煙にむせびてより死にぬといふまでは、對行となり。それより再び單行となりて一節を収む。うの進行の錯綜して變化あるはいと面白し。

第 二 大 段

このたび公卿の家、十六焼けたり。ましてうの外は、數知らず。すべて都の中、三分が一に及べりとぞ。男女死ぬるもの數千人、馬牛の類、かぎり知らず。人のいとなみ、みな思なる中に、さしもあやふき京中の家をつくらんとて、寶を費やし、心を悩ますことば、すぐれて、あぢきなくぞ侍るべき。三節この段の結束。以上二小段、京中にある人と家との危きを叙して、この世の厭ふべきとを説く。

〔解釋〕公卿とは、攝政關白、太政大臣、左右内大臣を公といひ、參議三位以上を卿といふ。○人のいとみなば人のする所のことなり。○さしもは、さもの意

にて助辭なり。○「あぢきなし」は、味氣なき意にて、面白味なし、いやになつたといふ意なり。○「侍る」は、消息文の候と同じく、人に對する敬語なれば、こゝにはいかゞあらじ。

(修辭法)總體をくゞりて二小段のまとまりをつく。寶を費やし心をなやますといひて、前段の假りの宿、誰が爲めに心をなやまし、何によりて目をよるこばきむるといふを顧みて、妙甚し。

この段は火災のことを叙して、人心を恐怖せしめて、それが却つて人を感じ動せしむる種子となれり。されば美といふことは、獨り人心を快樂ならしむるばかりでなし。或る點までは、人心を苦痛にすること、も、その範圍内にありと知るべし。

又た治承四年卯月二十九日の頃、中の御門、京極のほどより、大なる辻風おこりて、六條あたりまで、いかめしく吹きけること侍りき。一節、辻風の吹きにし大綱をあぐ。

(解釋)治承四年は、高倉院御在位十二年にあたり。○卯月は、陰曆の四月なり。卯の花月の略なりといふ。○辻風は、つむじ風なり。○いかめしくは、きびしくなり。

(修辭法)いかめしく吹きけるといひしゆゑ、下節にその風の猛烈なりしと細かに説き得て、妙。

第 二 大 段

三四町をかけて、吹きまくる間に、その中にもれる家ども、大なるも、ちいさきも、一つとして破れざるはなし。さながら、ひらに倒れたるもあり、けた柱ばかり、のこれるもあり。又た門のうへを吹き放ちて、四五町がほどに置き、垣を吹きばらひて、隣とひとつになせり。いはんや、家のうち、の寶、かずを盡くして、空にあがり、檜皮ぶき、板の類、冬の木、の葉の風に亂るゝが如し。塵を煙の如く、吹き立てたれば、すべて目も見えず。かびたいしくなり、どよむ音に、ものいふ

聲も聞えず。地獄の業風なりともかくこそばどぶ覺えける。二節力を極めて、辻風の猛烈を説く。

(解釋)けたは、梁上に施す所なり。○かすを盡くしては、ことごとくなり。○檜皮ふきは檜の木をうすく削りてふきたるなり。○業風は、劫風なり。劫は佛書に一世とあり、世の經過する一期をいふ。佛説に世界の破滅に三あり、第一は火災、第二は水災、第三は毘風といふ。この三災に世界の破滅するを一劫といふ。この業風は即ち毘風なり。

(修辭法)三四町をかけてといへるより破れざるなしといふまでは、文の綱にて、さながらといへるより風に亂るゝが如しといふまでは、ろの目なり。塵を叙する一句には、目も見えずといひ、音を叙する一句には、ものいふ聲も聞えずといひ、互にろの文を對せしめたり。かくて地獄の業風にて、上文を結び終れり。

家の損亡せるのみならず、之れをとりつくるふ間に、身を

第 二 大 段

ろこなひて、かたはつけるもの、數を知らず。この風、ひつじさるの方、うつり行きて、多くの人のなげきをなせり。辻風は常に吹くものなれど、かゝる事やはある。たゞことばあらず、さるべきものゝさとしかなぞと疑ひ侍りし。三節辻風の奇怪なるを説きて、上文を結ぶ。以上三小段辻風の慘なるを叙して、この世の厭ふべきを説く。

(解釋)かたはつけるは、片端の意にて、不具となりたるものをいふ。○ひつじさるは、坤にて、西南の隅なり。○かゝる事やはあるは、反語にて、かゝる事あらむや、ありはせぬとなり。○たいごとにあらずは、世のつねのことにあらずとなり。○ものゝさとしは、前兆のことをいふ。

(修辭法)この全節すべて單行にて、三小段を結べり。

また全じ年の水無月の比には、かに都移り侍りき。いと思ひの外なりしことなり。大かたこの京の初めを聞けば、嗟

峨天皇の御時、都とさだまりにけるより後、すべて數百歳を經たり。ことなる故なく、たやすくあらたまるべくもあらねば、これを世の人、たやすからず憂へあへるさま、ことわりにも過ぎたり。されどとかく言ふかひなく、御門より初め奉りて、大臣公卿ことごとく攝津の國難波の京にうつり給ひぬ。一節不意の遷都の事を叙す。

(解釋)同じ年の日は、治承四年六月二日、太政入道清盛の意にて攝津の福原に遷都ありしなり。○水無月は、陰曆六月のことなり。○この京は、もとの平安城なり。○嵯峨天皇の御時は、同天皇は桓武天皇の第二の皇子なり。この京即ち平安城を都と定められしは、桓武天皇なり。志かるを嵯峨天皇の御時とは、いかゞあらむ。○數百歳は、延曆十三年長岡の京より、この平安城に移られて、治承四年までに、帝王は三十二代、星霜は三百八十餘歳。○ことわりは、道理なり。○難波の京は、即ち福原なり。

(修辭法)このくだり抑揚甚だうの宜を得たり。うは思ひの外までの二句抑へたるが、ことわりにも過ぎたりの二句にて揚、それをばうつり給ひぬの一句に抑へて結束。

初めに、たやすくといひ、後ちにたやすからずといひて、互にうの辭を反映せしめて、精采を生せり。

言ふかひなくての文字妙。かくも緣由ある京都なるに、御門を初め奉り大臣公卿、盡く清盛の威に畏れ、すこくとして其の意に従ふことうたて、これとの意を含めり。

世につかふる程の人、誰か獨り古郷に残り居らむ。官位に思をかけ、主君の影を頼むほどの人は、一日たりともどく移らむと勵みあへり。時を失ひ、世にあまされて、期する所なきものは、うれへながら、とまり居たり。軒をあらそひし人のすまひ、日を経つ、荒れゆく。家はこぼたれて、淀川に浮び、

地は目の前に島とある。人の心みなあらたまりて、たゞ馬鞍をのみおもくず、牛馬を用とする人なし。西南海の所領をねがひ、東北國の莊園をば好まず。三節人争ふて新都に移りゆくゆゑ、舊都は荒れにあられたるを叙す。

方 丈 記

〔解釋〕古郷は平安城なり。○影は世俗に御かげといはむが如し。○期する所なきは、將來の望みなきものなり。○馬鞍は、武士の所業をいふ。○牛馬は、朝廷の官人の乗用なり。昔は朝廷の官人を重じて、武士を輕したりしが、保元平治の後は、人心一變して、武道の事のみを貴ぶ世とはなりぬ。

〔修辭法〕時を失ひ世にあまされて云々の一句は、反映法なり。上の上文の官位に思をかけつる人を強く見はさむか爲めに、下の反對の事柄をひきて之れを反映せしめられたるなり。

世につかふるの一句は、單行にて、官位に思をかけたの二句は對行なり。軒を争ふひの一句は單行にて、家はこぼれたれの一句は對行なり。人の心の一讀

は單行にて、たゞ馬鞍の二讀は對行なり。かくて西南海の二讀は對行なり。句法錯綜して、人心の世とともに移りかはるさま、今日目の前に見る處に思はれて、古も今も全一の歎聲を發せざるを得ず。

第 二 大 段

その時、かのづから事のたよりありて、攝津の國今の京に至れり。處のありさまを見るに、その地、ほどせはくて、條里をわくるに足らず。北は山にそひて高く、南は海に近くて下れり。波の音常にかまびすしく、鹽風殊に烈しく、内裏は山の中なれば、かの木の丸殿も、かくやど、なか／＼やうかはりて、優なるかたも侍りき。日々こほちて川もせきあはず、ばこびくたす家は、いづくに作れるにかあらむ。猶ほ空しき地は多く、造れる屋はすくなし。古郷は既に、あれて、新都は未だ成らず。ありと、しある人みな、浮雲の思をなせり。もとより此の所に居たるものは、地を失ひて憂へ、今うつ

り住む人は、土木の煩あることを歎く。道の邊を見れば、車  
 にのるべきは馬にのり、衣冠布衣なるべきは、ひたしれを  
 きたり。都のてより、たちまちにあらたまりて、たゞひなび  
 たる武士にことならず。これば世の亂るゝ瑞相とか聞き  
 おけるも、志るく、日を経つゝ世の中うき立ちて、人の心も  
 収まらず、民の憂つひに空しからざりければ、全年の冬、な  
 ほこの京にかへり給ひにき。されどこほちわたせりし家  
 どもば、いかになりにけるにか、悉くもとのやうにもつく  
 らず。三節おのが實見上より新都の不便なるをいひて、再び舊都に移りし  
 ことを叙す。

(解釋) 條里は拾芥抄に、條起從北、行於南。里起從西、行於東。三十六町爲一里、六  
 里爲條といへり。都市の割方なり。平安城は、一條より九條まで、東西に町な  
 したりしに、この新都は、せまくて、餘地なきをいへり。○木の丸殿は、丸木の

欠

MISSING

第 六 二 段

なり。今の世の中、ありさま昔にならずらへて知りぬべし。

四節古の反對をわけて、今の政事の民苦を察せざるをいふ。以上四小段、福原遷都のことをいひて、この世の厭ふべきを叙す。

(解釋)はのかにとは、明瞭ならぬ心なり。明白には分からぬを傳へ聞く所によればとて、著者の謙遜の辭なり。○「御殿に茅をふきて云々」とあるは、極めて質素のさまにて、堯舜の時代のことをいふ。○「煙のともしき云々」は、仁徳天皇の御事なり。○「だに」といへば、助辭にて、重きものをあげて、輕きものを言外に思はしめたるなり。さへも助辭にて、これは物のあるが上に、更らに添はる心なり。外にゆるされし物ある上に、みつき物もなり。

(修辭法)上文の三節ともに、遷都の非をわけて、之れを攻撃せしが、この節に至り、古の政事の民苦を察するにあることをいひて、之れを反映せしめたり。之れを一正一反の文法とはいふなり。

今の世のありさまといへる一讀にて、上文を結ぶ。上文三節とも非常に長



なり。今の世の中のありさま、昔にならずらへて知りぬべし。

四節古の反對をあけて、今の政事の民苦を察せざるをいふ。以上四小段、福原遷都のことをいひて、この世の厭ふべきを叙す。

(解釋)はのかにとは、明瞭ならぬ心なり。明白には分からぬを傳へ聞く所によればとて、著者の謙遜の辭なり。○「御殿に茅をふきて云々」とあるは、極めて質素のさまにて、堯舜の時代のことをいふ。○「煙のともしき云々」は、仁徳天皇の御事なり。○「だに」といへば、助辭にて、重きものをあげて、輕きものを言外に思はしめたるなり。さへも助辭にて、これは物のあるが上に、更らに添はる心なり。外にゆるされし物ある上に、みつき物もなり。

(修辭法)上文の三節ともに、遷都の非をあげて之れを攻撃せしが、この節に至り、古の政事の民苦を察するにあることをいひて、之れを反映せしめたり。之れを一正一反の文法とはいふなり。

今の世のありさまといへる一讀にて上文を結ぶ。上文三節とも非常に長

くろの長さものをこの一讀にて收む實に繁簡相對してろの宜を得たるものか。

又た養和の頃かどよ。久しくなりてたしかに覺えず。二年が間飢渴してあさましきこと侍りき。一節先づ大綱をあぐ。

(解釋)養和は、安徳天皇の年號にて、この頃は源順朝、木曾義仲相繼いで起り、京都の平氏はあつて、ふためきたり。○飢は五穀の熟せざるをいひて、野菜の出來ざるを饑といひ、渴は口の乾きて水を思ふさまなり。○あさましきは思ひがけざることなり。

方 丈 記

(修辭法)二年が間飢饉ありしをいひて、ろの大綱を掲げおき、次きにろの一年二年のを割けていふ、これ細目。

或は春夏ひでり、或は秋冬大風大水などよからぬ事ども、うちついききて五穀盡くみのらす。空しく春耕し、夏うふるいとなみのみありて、秋刈り冬収むるぞめきなし。これに

第 二 大 段

よりて國々の民、或は地をすて、堺を出で、或は家を忘れて、山に住む。さまづの御祈りはじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども、更らにその志るしなし。京のならひ、なにわさにつけても、もとは、田舎をこそ頼めるに、絶えてのほるものなければ、さのみやは、みさをも作りあへむ。念じ、佗びつゝ、寶物かたはしより捨つるか如くすれども、更らに目みたつる人もなし。たまゝかふるものは、金を軽くし、粟を重くす。乞食道のべに多く、憂へ悲ぶこと、耳にみたり。二節、第一年月の飢饉をいふ。

(解釋)うち、たい辭を強くするものにて、意味なし。○なめてならぬ法は、普通でない法なり。いろく、の祈りなり。○田舎をこそ頼めるには、もと都の繁榮するは、地方の富

く、うの長さものをこの一讀にて收む實に繁簡相對してうの宜を得たるものか。

又た養和の頃かどよ。久しくなりて、たしかに覺えす。二年が間飢渴して、あさましきこと侍りき。一節先づ大綱をあぐ。

(解釋)養和は安徳天皇の年號にて、この頃は源賴朝、木曾義仲、相繼いで起り、京都の平氏はあわて、ふためきたり。○飢は五穀の熟せざるをいひて、野菜の出來ざるを饑といひ、渴は口の乾きて水を思ふさまなり。○あさましきは思ひがけざることなり。

(修辭法)二年が間、飢饉ありしをいひて、うの大綱を掲げおき、次にうの一

年二年のを割けていふ、これ細目。

或は春夏ひでり、或は秋冬大風大水など、よからぬ事ども、うちついききて、五穀盡くみのらす。空しく春耕し、夏うふるいとなみのみありて、秋刈り冬取むるぞめきなし。これに

よりて國々の民、或は地をすて、堺を出で、或は家を忘れて、山に住む。さまざまの御祈りはじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども、更らにその志るしなし。京のならひ、なにわさにつけても、もとは田舎をこそ頼めるに、絶えてのほるものなければ、さのみやは、みさをも作りあへむ。念じ佐びつゝ、寶物かたはしより捨つるか如くすれども、更らに目みたつる人もなし。たま〜、かふるものは、金を軽くし、粟を重くす。乞食道のべに多く、憂へ悲おこる耳にみたり。二節、第一年目の飢饉をいふ。

(解釋)うちは、たい辭を強くするものにて、意味なし。○うめきは、騒ぐことなり。○地をすて、云々は、食を求めむとて、四方に奔走するなり。○さまざまの御祈りは、朝廷にてもなり。○なべてならぬ法は、普通でない法なり。いろくの祈りなり。○田舎をこそ頼めるには、もと都の繁榮するは、地方の富

裕なればなり。志かるに、地方飢饉にて、かく寂寥たれば、都にのぼるもの絶えてなしとなり。○さのみやは、みさをもち作りあへむは、みさをば、操なり。心を堅固にもちて、家の諸道具等を、まつかりと守ることなり。かく不景氣なれば、都の人々も、これまで通りには、家の寶物を守り居ること出来ずとなり。○あへむは、堪へ難しとなり。○念じわびは、心頭にわけて、堪へ忍ぶことなり。○目みたつる人もなしは、いかなる寶物も、飢渴を凌ぐに足らざれば、見たと之れを買はむとする人もなしとなり。○たゞかふるものは、云々は、稀れにうの重寶と交換せむとするものは、金銀を軽くして、粟即ち五穀を重くするとなり。

(修辭法)上節の飢渴の二字を、この節にて之れを敷衍していへり。第一句は、飢渴の原因をいふ。第二句は、民人の勞して効なきをいふ。第三句は、食を求めむとて四方に離散するをいふ。第四句は、之れを救助せんとすれど、うの効なきをいふ。第五第六第七句は、都に於いて、家の重寶を、二束三文にうり

飛ばすをいふ。この處極めて詳密。第八句は、乞食の多きに堪へざるをいへり。かくの如く敷衍し來るも、之れをついひれば、飢渴の二字に過ぎざるなり。以て文の繁簡法を悟るべし。

第 二 大 段

さきの年、かくの如く、からくして暮れぬ。明くる年は、たちなほるべきかと思ふに、あまさへ、えやみ打ちそひて、まざるやうに、跡かたなし。世の人、なみ飢ゑ死にければ、日を経つゝ、きはまりゆくさま、少水の魚のたとひに叶へり。はては、笠うちき、足ひきつゝ、みよろしき姿したるもの、ひたすら、家ごとに乞ひありく。かくわびしれたる者ども、ありくかど見れば、則ちたふれ死ぬ。ついひぢのつら、路頭に飢ゑ死ぬるたふひは、數知らず。とり捨つるわざもなければ、くさきか、世界にみちくして、かはり行くかたちありさま、目もあてられぬこと多かり。いはむや、川原などには、馬車の

行きちがふ道だにもなし。三節、第二年目の飢饉をいふ。

(解釋)あまさは、あまつさへなり。うのうの心なり。○たやみは、疫病なり。○まさるやうに跡かたなしは、去年よりもまさるやうに覺えて、さまじくの所りも、更らに跡かたなく、さしめなしとなり。○少水の魚は、往生要集に見えて、水の次第に減しゆきて、うの中の魚の命數の窮されるをいふなり。○笠うちき足ひきつゝ、みは、常の乞食は、顔もあらはに、足もすねも見はしてゆくものなれど、こゝのは、飢饉の爲めに乞食となりはてたりければ、顔は笠をきて人に見えぬやうにし、足などは、衣につゝみて、あらはさざる。一種の乞食ありとなり。○わびしければ、落ちぶれば、てたるをいふ。○ついでひぢのつらは、土にて築きたる垣をいへり。○つらはは、連にて、うのは、とりをいふ。○とり捨つるわざは、とりかたづけて、埋葬することなり。

(修辭法)第一年目には、飢饉なれども、未だうの甚さに至らざりしが、第二年目に至りて、一種の乞食を生じ、あまつさへ路傍にたふれ死するものを叙す。

第 二 大 段

方 丈 記

せり。うの慘層一層深くなりゆけり。之れを漸層法といへり。

あやしき山がつも、力つきて、薪にさへともしくなりゆけば、たのむかたなき人は、みづから家をとほちて、市に出で、うるに、一人か持ち出でぬるあたひ、なほ一日が命をさしふるに、だに及はずとぞ。あやしきことば、かゝる薪の中に、丹つき、白金こがねのはくなど、所々につきて見ゆる木のわれ、あひまじれり。之れをたづぬれば、すべき方なきもの、古寺に至りて、佛をぬすみ、堂の物の具をやぶり取りて、わりくだけるなりけり。濁悪の世にしも、生れあひて、かゝる心うきわざをなん見侍りし。四節、飢渴のあまり、心にもなき盗をなすを叙す。

(解釋)山がつは、山夫なり。山樵人などをいふ。○たのむかたなき人は、より頼むべきものなきなり。生活を助けらるゝは、その人なきをいへり。○丹つ

きは赤き色のつきたるなり。○白金こかねのはくなきは、白金は銀こかねは黄金なり。はくは箔にて、金類をのべて紙の如くして、物にきせて用ゐるをいふ。○すべき方なきものは、生活にせむすべなきものなり。

(修辭法)人窮すれば斯に濫するといふ意、愈し得て明快。神佛は世人のいと貴ひて、その物を取れば、忽ち罰せらるべしとおうれにおうれて、やまざる所なるを、その窮迫の爲めには、そのものをすら盗み取りて、憚る所もなし。これその甚きものを舉げて、その他を推測せしむる法なり。

又たいとあはれなるをも侍りき。さりがたき女男など、持ちたるものは、そのこゝろをさし勝りて深きは、必ずさきだちて死にぬ。その故は、わが身をば、つぎになして、男にもあれ、女にもあれ、いたはしく思ふかたは、たましく乞ひ得たるものを、まづゆづるによりてなり。されば、父子あるものは、定まれるをにて、親ぞさき立ちて死にける。又た母がい

方 丈 記

のち盡きて、ふせるまも知らずして、いとけなき子の、その乳房にすひつぎつゝ、ふせるなどもありけり。五節餓死の悲惨の極を叙す。

(解釋)さりがたきは、捨て去りがたく、大事に思ふとなり。○持ちたるものは、男ならば女を、女ならば男を、各、深く思ふ方を志かいへり。○定まれることにては、親の子を思ふは、子の親を思ふよりもまされることは、定まれることとなり。

第 二 大 段

(修辭法)これも一の甚きものを舉げて、他を推測せしめたるものなり。かくてその愛情の上にて、一方は有心なるものをわけて、その極を叙し、一方は無心なるものをわけて、その極を叙せり。讀者も、こゝに至りて卒讀に堪へざるべし。

仁和寺に隆曉法印といふ人、かくしつゝ、數しらず死ぬることを悲みて、ひむりをあまたかたらひつゝ、その死首の

見ゆることに、額に阿の字をかきて、縁を結ばしむるわざをなむせられける。うの人数を知らむとて、四五兩月のほど、かぞへたりければ、京の中、一條より南九條より北、京極より西、朱雀より東、途のほりにある頭すべて四萬二千三百餘なむありける。況むやうの前後に死ぬるもの多く、川原、白川、西の京もろくの邊地などを加へていはゞ、際限もあらず。いかにいばむや、諸國七道をや。近くは崇徳院の御位の時、長承の比かどよ、かゝるためしはありけると聞けど、その世のありさまは知らず。まのあたり、いとめづらかに悲しかりし事なり。」六節飢死の多きを叙して上文を結ぶ。以上

五小段飢饉にて、飢死の多きを叙して、この世の厭ふべきをいふ。

〔解釋〕仁和寺は、山城國葛野郡にあり。○隆曉法印は、源の俊隆の男なり。○「ひじり」は、聖僧高僧などいへど、又た僧侶のことを普通にまかひふことも

あり、こゝも全し。○阿の字は阿彌陀佛の阿の字なり、引導を渡す意なり。○縁を結ばしむるは、成佛の縁を結ばしむるとなり。○「一條より云々」は、南北は條にて、東西は里なり。○川原は、山城の國愛宕郡東川原なり。○白川も、うの郡にあり。○西京は、もと京都を左右の二京に分ち、右京は即ち西の京なり。西の京は、はやく衰へて田舎となれりしなり。○七道は、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海なり。

〔修辨〕法首といひ、頭といひ、うの局部をあげたれど、うの全身をいへるなり。之れをうの局部をあげたるまでにて、うの全部は、うの中に含まるいな。僧侶の死者結縁のことをいひて、うの数の多きを叙して、うの悲惨の烈しかりしことをいへり。

京の中、一條より云々の句は、叙事齊然といひ、明晰。況むやの句にて、一歩を進め、いかにいはむやの句更らに數歩を進む。之れを百尺竿頭數歩を進むといふ。うかにいはむやといへるは、漢文訓讀より來りて、普通文に用ゐる

ても支なかるべし。

崇徳院の御位の時云々は事例を引きて前文を証するものなり。

又た元暦二年の頃、大なるふるこ侍りき。うのさま、つねならず、山はくづれて、川をうつみ、海はかたふきて、陸をひたせり。土さけて水わきあかり、いははわれて谷にまろび入り、なぎさこぐ船は波にた、よひ道ゆく駒は、足のたちどをまどはせり。いはむや、都のはとりには、在々所々、堂舎、塔廟、ひとつとして全からず、或はくづれ、或はたふれたる間、塵灰たちのほりて、盛なる煙の如し。地のふるひ、家のやふる、いおどい、かづちに異ならず。家のうち居れば、忽ちに打ちひしけ、なんどす。走り出れば、又た地われさく。羽なければ、空へもあがるべからず。龍ならねば、雲にのほらむこと難し。おろれの中に恐るべかりけるは、たゞ地震なり。

けりどぞ、覚え侍りし。一節再び地震の烈しきを叙す。

〔解釋〕元暦は、後鳥羽院の年號なり。二年の八月に文治と改元せり。○なるは、地震の古言なり。○「たちど」は、立ち處なり。たちどは、うの約まりたるなるべし。○「在々所々」は、どこでもとなり。○「堂は寺なり、舎は家なり、塔は佛を安置する處なり、廟は先祖を祭れる處なり。要するにこゝには、すべて地上に建ちたる物をいふなり。

〔修辭法〕かみなりといはずして、いかつちといふうの音に、勢カあればなり。うの思想、とうの辭のつかひ、さまと相適合して、耳邊にうの烈き音を聞くが如し。

羽なければ云々の二句、文に游術ありて、妙。上來の文までは、いといるがはしくまじめに叙し、來りしものを、この二句に至り、忽ちまやれたる思想を加へて、文章豁然として、迫らず、游術餘地あるものといふべし。この處、叙事、粲然として、最も妙趣あり、地震の烈きさま、今目の前に見るや



うなり貴びても猶ほ貴ぶべかりけるは文章なりけり不朽の盛事とはこゝをこれ言へるなるべし。

方 丈 記

ろの中にある武士のひとり子の六つ七つはかりに侍りしがついでひぢのおほひの下に小家をつくりてはかなけなる跡なし事をして遊ひ侍りしが俄かにぐづれうめられてあどかたなくひらに打ちひしかれて二つの目など一寸ばかりうち出されたるを父母かよへて聲もをしまず悲みあひて侍りしこそあはれにかなしく見侍りしか。子の悲みにはたけきものも耻を忘れけりと覺えていどほしくことわりかななど見侍りし。二節小兒の慘狀を叙して地震の烈きをとく。

(解釋)上古我國兵士のことを物部といへりざるを後世ものゝへのへとふとは通音なればものゝふといひなせり。○おほひは築垣の上の屋根なり。○

「はかなげなる跡なし事してはつまらぬ跡方なき隠れしてなり。○いとはしくは不便になりといはむが如し。

(修辭法)上節に地震の大要を總叙せるものから、こいはるの一事件の極めで悲惨なるものをわけて之れを細叙せり。二の目など一寸ばかりうち出されたるをといへるは、るの悲、るの慘、讀むに堪へず、殊にたけき武士をあげて、るの歎き悲めるをいひ、るの状態、言ふに忍びず。

前段には母死して、るの子獨りのこりて乳房にすがりしことを叙せしがこいはるの子ばかり死して親の悲めるさまを叙せり。前文、後文、相對して妙極まりぬ。

第 二 大 段

かくおびたゞしくふることば、志はしにてやみにしが、そのなごり、しはく絶えず。世のつねに驚くほどの地震、三十度ふらぬ日はなし。十日、廿日、過ぎにしかば、やうく、間どほになりて、あるは四五度、二三度、もしば一日、ませ、二

三日に一度などおほかたろのなごり三日ばかりや侍り  
けむ。四大種のうちに水火風はつねに害をなせど大地に  
いたりてはことなる變をなさず。三節地震のなごりを叙す。

〔解釋〕一日ませのませは交互の心なり。一日おきになり。○四大種は地震水  
害、火災、風災をいふ。

〔修辭法〕水火風をわけて地震の一層甚きをいへり。これ證據法なり。且つ地  
震のなごりを叙して又た文の餘波ともなりぬ。

昔齋衡の頃かどよ。大地震ふりて東大寺の佛のみぐし落  
ちなどして、いみじきとも侍りけれども、なほこのたひ  
にはしかすどぞ。即ち人皆なあじきなぎことを述べて、聊  
か心の濁りも、うすらくかど見しほどに、月日かさなり、年  
越えしかば、後は言の葉にかけて、いひ出づる人たになし。』

四節前例を引き、今回の地震の烈きを叙して結束す。以上六小段、再び大地震  
を叙して、この世の厭ふべきをいふ。

〔解釋〕齋衡は、文徳天皇御在位四年に改元せる年號なり。○東大寺は南都の  
七寺の一なり。○みぐしは御頭なり。○心の濁りは名利に走る心なり。かゝ  
る變災にわひては、少しはろの心うすらくべきにとなり。

〔修辭法〕漸々世の無常を感じて隱遁すといふ段に近かつくまゝに、心の濁  
り云々の事をいひおけり。人生終極、譬々種々として、たゞ利にこれ走り、名  
にこれ狂するころ、うたてけれ。ろの文罵り得て痛快。

すへて世のありにくきこと、わが身と住家とのばかなく  
あだなるさま、かくの如し。いはむや、所により、身のほどに  
またがひて、心をなやますこと、あけて數ふべからず。二節數  
小段をくるめて、わが身と住家と無常なるをいひて、この世の厭ふべきを  
とく。

〔解釋〕あたは、無益の事なり。

(修辭法)この段、遠く一大段にもどりて、わが身と住家との無常なるをいふ。之れを繳還法といふ。殊に心をなやます云々は、一大段の難か爲めに心をなやましといへるに應じて、妙甚し。

もしおのづから身かなはずして、權門の側に居るものは、ふかくよろこぶとはあれども、大いに樂しよにあれはず。なげきあるときも、聲をあけて泣くことなし。進退やすからず、立居につけて、おそれのよくさま、たとへば、雀の鷹の巢に近づけるか如し。もし貧くして、富みたる家にとなりに居るものは、朝夕すほき姿を耻ぢて、へつらひつゝ出で入る、妻子僮僕のうちやめるさまを見るにも、富める家の人のないがしるなるけしきを聞くにも、心念々にうごき、時としてやすからず。もしせまき地に居れば、近く炎上するとき、その害をのがるふことなし。もし邊地にあれば、

往反煩らひ多く、盜賊の難はなれかたし。二節層々説き來りて、この世のあぢきなきをいふ。

(解釋)身かなはずしては、身にかなはずしてなり、身のほかに應せずしてなり。○權門は權勢ある家なり。國の政をつかさどりて、世に時めきたるものをいふ。○をのよくは、恐れて震ふさまなり。○すほき姿は、みすばらしき姿なり。○心念々に動きては、見るもの聞くものにつけて、心の動きたつをいふ。○炎上は、火災のこと、火災なり。

(修辭法)權門の一層、富家の二層、これ隣家を以て、その文を對するものなり。狭地の三層、邊地の四層、これ土地を以て、その文を對せるものなり。これを層說法といふ。かくて一層は一層より簡に、三層四層に至りて、最も簡、これを繁簡相救法。

いさほひあるものは、貪欲ふかく、ひとり身なるものは、人にかるしめらる。寶あれば、おうれ多く、まづしければ、なけ

方

丈

記

き切なり。人を頼めば、身他の奴となり。人をばてくめば、心恩愛にづかばる。世にまたがへば、身くるし。又たまたがはねは、狂へるに似たり。いつれの處をまめ、いかなるわさをまてか、まはしも、此の身をやどしたまゆらも、心を慰むへき。』三節結束、七小段總叙して上文を結ぶ。以上二大段人生無常のことを歴叙して、全くこの世の厭ふべきをいふ。

〔解釋〕たまゆらはまばらくもなり。

〔修辭法〕反對の思想を互に結びつけ、文の精采をとりて、妙甚し。人を頼めば云々の句、名言磨せず、實に千古の金言といふべし。

いつれの處をまめといへるにて、一大段の假りの宿を承け、いかなるわさしてかといへるにて、一大段の生れ死ぬる人を承け、この身をやどしといへるにて、いつれの處をまめといつるを結び、心を慰むへきといへるにて、いかなるわさしてかといへるを結ぶ。庶應嚴密結束に、一點のすきなし。二

大段のまどまりや實に、うの妙を得たりといふべし。

我が身、父方の祖母の家を傳へて、久しく彼の所に住む。その後、縁かけ、身おとろへて、忍ぶかたしく、まげかりしかば、つひに跡とむることを得ずして、三十餘にして、更らに我

心と一つの菴を結ぶ。一節初めの家を捨て、第二の家を結ぶを叙す。

〔解釋〕長明の父は、長繼といへりしなれど、うの祖母は傳はらず。○「祖母の家」とは、たゞうの家屋をいひて、うの家の系統にあらざるべし。○縁かけは、先祖代々、社務職なりしが、長明に至りうの職をつぐことを許されざりければなり。

〔修辭法〕先づ最初の家を叙し、次ぎて世をのがれて第二の菴を結ぶを叙す。更らに我心と、一つの菴を結ぶといひて、人と住家との文線を連絡せり。

これを在りしすまひにならずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋はかりをかまへて、はかくしくは屋をつくるに及

はず。わづかについひぢをつけりといへども、門たつるた  
つきなし。竹を柱として、車やどりとせり。雪ふり、風ふくご  
とに、危ふからずしもあらず。處は川原近ければ、水の難深  
く、白波の恐も、さわがし。すべてあらぬ世を念じすごしつ  
く、心をなやませる。とば、三十餘年なり。うの間をりくの  
たかひめに、おのつから短き運をさどりぬ。二節、第二の家も危  
くして、心をなやませるを叙す。

〔解釋〕在りしすまひは、初め長明が傳へ領せる祖母の家なり。○なすらふる、  
は比較するなり。○はかくしくはしつかりとしたるなり。○たつきなしは  
便なしとなり。○車やどりは、門の側に車を入るゝ處なり。○川原は鴨の川  
なり。○白波は、盜賊のこと。後漢靈帝紀に、黃巾郭泰などいふもの、西河の白  
波谷にありて、賊を爲せり。これより盜賊を志かいへり。○あらぬ世は、案外  
なる世なり。とんでもなき世なり。○念じすごしは、うの案外なる世をば、初

方 丈 記

第 三

大 段

めはまだよきものと思ひすごしてなり。○三十餘年は、初め祖母の家を傳  
へたりしは、二十歳前後のことにて、うれより第二の家を結びて、うこにて  
三十餘年も、あらぬ世をすごしとなり。○をりくのたかひめは、四時のう  
つり、かはりなり。四時のうつり、かはりにて、世上の變遷より、おのれか否運  
をさどりぬ。○運は、命數なり。

〔修辭法〕一節は叙事なるが、この二節は議論なり。初めの家に比して、うの小  
なること十分が一なり、かくても、まだ危くて、安からぬをいへり。心をなや  
ませることは、三十餘年なりといひて、第一大段の假りの宿、誰が爲めに心  
をなやましといへるに照應す。

すなはち五十の春をむかへて、家を出で、世をそひけり。も  
とより、妻子なければ、捨て難きよすがもなし。身に官祿あ  
らず、何につけてか、執をとぐめむ。空しく、大原山の雲にい  
くそ、はくの春秋をか、經ぬる。三節、おのれが世を遁れぬる所以をい

ふ。以上一小段第一第二の家を叙す。

(解釋)「すがは」は縁なり。○「官祿」は官よりうくる俸祿なり。○「執」は「まう」と音すべし。物にはなれがたきをいふ。執念なり。○大原山は山城の國乙訓郡大原野の西にあり。第二の家はこゝに在り。○春秋は年といはむが如し。

(修辭法)家を出で、世をうむけりといへるは、全篇の主意なり。第一大段、第二大段には、勉めてこの世の厭ふべきを叙して、然る後ち第三大段に至り、この主意を迫り出せり。こゝの文によれば、第二の家にて、この世をうむきしなり。

こゝに六十の露消えかたにおよびて、更らに末葉の宿りを結ぶることあり。いはば獵人の一夜の宿を作り、老いたるかひこのまゆをいとなむが如し。一節、第三の家をいとなめるを叙す。

(解釋)末葉の宿りは、上文の露の字にちなみて、細小なる家をいふ。○獵人は

鳥獸をかりする人。

(修辭法)上文に露といひて、うれより縁をとりて、末葉といふ。之れを縁語といふ。獵人の比喩、おはれ深く、老獵の比喩、更らに妙を覺ゆ。

これを中比のすみかにならずらふれば、又た百分が一にたも及ばず。とかくいふ程に、齡はとしく傾き、すみ家は、をりくにせはし。うの家、のありさま、世のつねならず。廣さは、僅かに方丈。高さは、七尺がうちなり。所を思ひ定めざるがゆゑに、地をきめてつくらず。土居をくみ、打ちおほひをふきて、つぎめごとに、かけがねをかけたなり。二節、第三の家、うの細小なるを叙す。

(解釋)中比のすみかは、第二の家なり。○「とかくいふ程は」とかくするは、なり。○「方丈」はこの文の題をこゝに取れるにて、四方一丈との意なり。○「所を思ひ定めざる」は、出家遁世の身にて、一所不住なればなり。○「地をきめ」は、地

を占めて、吉凶を下し、うこを定めて作りしにあらすとなり。○土居は、四方を圍む壁なり。○うちおほひは、屋根のことなり。

(修辭法)又た百分か一にも及はすといひて、前小段のありしすまひになすらふに十分か一なりといへるに應じて、層一層、うの家の細くなりゆきしをいへり。之れを層進法といふ。

無形物の齡に對して、うの有形物にのみ主として用ゐる傾きといへる動詞をかりて之れ見はせり。これを辭の上の交換法といふ。

もし心。に。か。な。は。ぬ。こ。と。な。ら。は。や。す。く。外。に。う。つ。さ。む。か。た。め。な。り。その改め作るとき、いくそほくの煩かある。積む所わづかに二兩なり。車の力をむくゆる外は、更らに用途いらず。三節、第三の家の煩なきを叙す。以上二小段、第三の家の細小にして、却つて心を安するに足るを叙す。

(解釋)やすく外にうつさむか爲めなりは、容易に外にもてゆきて移轉せし

方 丈 肥

第 三 大 段

めむとてなり。○いくろばくの煩かあるは、せれだけの面倒もなしとなり。○つむ所わづかに二兩なりは、家々るみ、車にのせて、もてゆきたりどて、僅かに車二臺に過ぎすとなり。○車の力をむくゆる外は、車の力をかりて、うの料を報する外はなり。○用途は、入費なり。

(修辭法)うの家の小なれば、かく心安くも、おのれの自由勝手になるなり。この意をもて二小段の結束とす。一小段には、第一第二の家は、うの心をなやませたるをいひて、二小段に至りて、うの家の小なるが爲めに却りて心を安することはいひて、この二小段を主として見はむとて、一小段を假りて、之れを反形せしめたり。

いま日野山の奥に、跡をかくして、南にかりのひがくしをさし出して、竹のすのこを志き、その西に、関伽棚をつくり、中には西の垣にそへて、阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日をうけて、眉間の光とす。彼の帳のとひらに、普賢ならびに

不動の像をかけたなり。一節、日野山の家、即ち第三の家を叙する一。

(解釋)日野山は、山城の國宇治郡木幡山の東北にあたり。○ひかくしは、日隠にて、庇をいひ、ひさしのことなり。○竹のすのこは、竹の縁側なり。○關伽棚關伽は、梵語にて、清き水をいふ。佛に供すへき水をおける棚なり。○阿彌陀も梵語なり。無量壽覺と譯す。如來の名なり。○安置は、すえおきて崇むるをいふ。○落日をうけては、入り日をうけてなり。○帳は、とばりにて、幕の類なり。○とひらは、開き戸なり。○普賢は、聖僧の名なり。○不動は、明王の一なりと、佛經にいへり。

方 丈 記

(修辭法)いま日野山の奥に跡をかくしてといふたるばかりにて、家をろの地に立てたることは、言はずして明瞭なり。之れを言外表彰法といふ。

北の障子の上に、小さき棚をかまへて、くろき皮籠三四合を置く。すなはち和歌管絃、往生要集ごとき抄物を入れたり。傍に琴、琵琶、かのくく一帳をたつ。いはゆる、きりごと、

第 三 大 段

つぎ琵琶、これなり。東にそへて、わらびのほどろをしき、つかなみを敷きて、夜の床とす。東の垣に、窓をあけて、こゝにふつくろを作り出だせり。枕のかたに、すびつあり。これを柴折り、くふる、よすがとす。菴の北に少地を定め、あはらなるひめ垣をかこひて、園とす。すなはち、もろくの薬艸を栽るなり。假りのいはりのさま。此の如し。二節、日野山の家、即ち第三の家のさまを叙する二。

(解釋)皮籠は、革にてつゝみたる箱をいふ。○三四合は、三四個といはむか如し。○管絃管は、竹にて作れるものにて、笙笛の類をいひ、絃は糸をかけて、かきならすものにて、琴琵琶の類なり。要するに鳴物を總稱したるなり。○往生要集は、惠心院の僧都源信の著作なり。○抄物は、かき抜きせるものなり。和歌管絃若くは往生要集などを、かきぬきせるものなり。○琴は、いろくの種類あり、こゝのは、箏の琴なり。十三絃なり。一より五までを大絃とし、六



より十までを中絃とし、十一より十三までを細絃とす。うのうち十一を斗、十二を爲、十三を巾（ま）といふ。○「琵琶」は、三才圖繪に、推手（シヤス、ムルサ）前日（シヤチ）批引（シヤチ）手日（シヤチ）把といひ、うの引く手のさまにて、かく名けたるなり。四絃四柱なり。○「をりこど」は、をりて、たしめる琴なり。○「つき琵琶」は、つき合して、うれに仕立てたるなり。○「わらひのはとろ」は、わらひは蕨なり。はとろは、うの穂の長く出でたるなり。○「つかなみ」は、蕨をあみたる敷物なり。○「ふつくま」は、文机なり。○「枕のかた」には、枕の側なり。○「すびつは」は、あろりなり。○「くふるは」は、火に入れて焼くをいふ。○「あばら」は、荒れはてたるなり。○「ひめ垣」は、小なる垣なり。

（修辭法）前節は家のさまを略叙し、この節は家のさまを詳叙せり。假りのいはりのさまは此の如しといへるにて、一節二節を結び、うの縁によりて三節の結束、即ち觀念云々の句を迫り出せり。

うの所のさまをいはは、南にかけひあり。岩をたしみて、水をためたり。林、軒近ければ、つま木をひろふに乏しからず。

方 丈 肥

第 三 大 段

名を外山といふ。正木のかづら跡をうづめ、谷志けしれど、西ははれたり。觀念のたよりなきにしもあらず。三節附近の地のさまを叙して、結束とす。以上三小段、二小段を受けて、うの家のさまを詳叙す。

（解釋）かけひは、懸け樋なり。竹の筒をかけて、水を通はすもの。○「岩をたしみて云々」は、懸け樋にて、通はせる水を岩をたしみかけて、ためおくなり。○「つま木」は、手して、つまみよせ、あつむるほどの小なる木にて、薪にするものなり。大なるを薪といひ、小なるをつま木といふ。○「外山」は、日野山の奥に外山ありて、今も長明が方丈の遺跡なりとて、一の石ありといふ。○「正木」は、説あれど、南天に似た葉ありて、冬の初めに紅葉して、美麗なるものとの説よろし。○「跡をうづめ」は、深くかくれ入りて、訪ひ來るものなきをいふ。○「西ははれたり」は、西方のみあきて物なければ、西方淨土を念するに便なり。○「觀念」は、佛道に深く悟りぬるをいふ。西方のあきたればなり。

(修辭法)二節は、假りのいほりのさま此の如しといひて、之れを結び、この三節に至り、うの意をひろめ、一層をすしめて、觀念のたよりなきにしもあらずといひて、之れを結び、西ははれたりといへるは、一節の落日をうけて眉間の光とすといへるに應して、妙。

春は藤波を見る、紫雲の如くして、西の方にはほふ。夏は時鳥を聞く、かたらふことに、までの山路をちぎる。秋は日ぐらしの聲、耳にみり、うつ蟬の世を悲むかど聞こゆ。冬は雪をあはれふ、つもり、きゆるさま、罪障にたどへつべし。一節四時の景を叙す。

(解釋)藤波は、藤の花を、まかたどへていへるなり。○紫雲は、古來より歌にも藤の花によろへて、よめるが、多し。瑞雲といはむが如し。○かたらふことに、式時鳥のなくごとくになり。○までの山路は、ゆきて歸らざる冥途をいふ。時鳥の異名のまでの田長といへるによつて、かくいへり。○日ぐらしは、秋蟬

方丈三配

の一種なり。秋の日の暮れ方に、いと寂しげになく、故にしか名のれり。○うつ蟬は、蟬のもぬけがらをいふ。世の中のはかなさに比へていふ。○罪障は、前世に罪ありて、往生するごきの障となるものなり。

(修辭法)四時の景色を説き來りて、此の如く觀念す。三小段の、觀念の二字を擴め、之れを四時の景に結びつけて、いへり。觀念の二字を分析し來りて、之れを詳叙す。文は四句、整齊たれど、うの繁を覺えず、妙。

もし念佛ものうく、讀經止めならざる時は、自らやすみ、自ら怠るに、さまたぐる人もなく、また恥つべき友もなし。こと更らに無言をせされども、獨り居れば、口業をさめつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なれば、何につけてかやぶらむ。もし跡のまら浪に、身をよする朝には、岡の屋にゆきかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ。もし桂の風葉を鳴らす夕には、潯陽の江を思ひやりて、源

第三大方段

都督のながれをならふ。もしあまりの興あれば、志は  
松のひびきに、秋風の樂をたゞへ、水の音に、流泉の曲をあ  
やつる。藝はこれ拙ければ、人の耳を悦ばしめむ。にもあ  
らず。獨り志らべ、獨り詠じて、自ら心を養ふはかりなり。二  
節、この地に居ては、自由勝手、心のまゝなるをいふ。以上四小段、三小段を受  
けて、この地の心にならひたるを叙す。

方 丈 記

〔解釋〕念佛は、南無阿彌陀佛の名稱を唱へて佛に念するなり。○ものうくは、  
ものにくとくなりゆきたる心にて、念佛するが、たいぎになりたるなり。○讀  
經は、佛經をよむなり。○まめならざるは、勉強せざるなり。○自らやすみ自  
ら怠るは、もと念佛するも、讀經するも、人に見せしめて、見ぬにはやらす、おの  
れの心の、うれれに向はざるときは、何の遠慮もあることなし。○口業は、口に  
て作る罪業をいふ。○禁戒は、罪障に落ちざる爲めに守る所の禁制をいふ。  
○境界は、罪障を誘ひ出だす場處をいふ。○跡のまら涙、云々は拾遺集、哀傷

第 三 大 段

の部に、滿沙彌の歌に、世の中は何にたどへむ朝はらけ、漕きゆく舟の跡の  
まら涙とあるによりて、この身のはかなきを、跡のまら涙にかけていへる  
なり。僧都源信といへるが、わけがたに、湖水をながめながら、この滿沙彌の  
歌を吟して、痛く感動し、和歌は觀念のたよりともなるべしといひて、うれ  
れより多くの歌よみ出でしとなり。岡の屋は地名にて、宇治川の東岸にあり  
とす。滿沙彌は左太辨正五位上笠朝臣麿のことにて、落髮して佛門に入り  
しものを沙彌といふ。○風勢をぬすみは、滿沙彌の和歌の意をとがて、この  
人の風をきどり、ぬすむとなり。○薄陽の江は、支那の江の名なり。白樂天の  
琵琶引に見えたり。○源都督都督は支那の唐代の官名にて、我邦にては太  
宰帥なるを、まか譯していへり。即ち源太宰帥は、桂大納言經信卿なり。この  
人、琵琶に長じたりしかば、世に之れを桂流といへり。故に上文には、桂の風  
と、うれれにひきかけ、下文には、流れをならふといへり。○あまりは、十二分と  
いはむが如し。○興は、物の趣味に感じて起る心をいふ。○秋風の樂は、盤渉

調の樂名なり、松のひびきに、自然とろの調こもれり。○流泉の曲は、琵琶の秘曲の名なり、水の音に自然とろの調こもれり。○あやつるは、ひくことなり。○拙ければ、長明もと管絃の道にも、妙なりしかど、自ら謙遜して、まかすべし。○自ら心をやしなふばかりなりとは、陶淵明も嘗つてこの心をのべたり。長明もこの心を以て之れをいへり。

(修辭法)この四小段の、一節も、二節も、對列にてろの文を進めたり。まかも四句以上を對列せしめて、まかのみならず、他の小段は多く三節をもて成立せしが、獨りこの小段ばかりは二節なり。これ他の小段と異なる所なり。

又た麓に一つの柴の庵あり、すなはち山守が居る所なり。かしこに小童あり。時々來りて相訪ふ。もしつれづれなるときは、これを友として、遊びありく。かれは十六、かれは六十、その齡、ことの外なれど、心を慰むることば、これ全じ。一節、小童却つて心を慰むるに足れるを叙す。

方 丈 配

(解釋)麗は、外山のふもととなり。○つれづれは、徒然のむまなり。○ことの外は、ことの外、異なるなり。

(修辭法)すなはちといひ、これといひつるは、漢文の調子、ろの盛なれど、二つの辭とも、なくもがなと覺ゆ。

この節の結東法、おもしろし。漢文にろの調子多し。

第 三 大 段

或はつばなを抜き、岩なしを取る。又たぬかごをもち、芹をつむ。或はすろわの田井に至りて、落穂をひろひて、ほろみをつくる。もし日うらうかなれば、嶺によちのほりて、遙かに故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさばりなし。あゆみ煩ひなく、こころざし、遠くいたる時は、これより峯つゞき、炭山を越え、笠取を過ぎて、或は岩間にまうで、或は石山をながむ。もしは又た栗津の原をわけて、蟬丸の翁が跡をとぶらひ。

田上川をわたりにて、猿丸大夫が墓を尋ね、歸るさには、折りにつけつゝ、櫻をかり、紅葉を求め、蕨をきり、木の實を拾ひて、且つは佛に奉り、且つは家づとにす。もし夜静かなれば、窓の月に、古人を志のび、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は、遠く槇木の島のかゞり火にまがひ、曙の雨は、おのづから、木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろくくと鳴くを聞き、きて、父か母かど疑がひ、峯の鷹の近く馴れたるにつけても、世に遠かるほどを知る。或は埋火をかき起として、老の寐ざめの友とす。おろろしき山ならねど、ふくろふの聲をあはれむにつけても、山中の景色をりにつけ、て盡ぐることをなし。況むや、深く思ひ、深く知れり、人の爲めには、これにしも限るべからず。二節再びこの地の心にかなひたるを叙す。

〔解釋〕つばなは、淺茅の花なり。○岩なしは、秋實を結ぶ灌木なり。○ぬかごは

方 丈 記

第 三 大 段

世のむかひとなり。○芹は、今のせりなり。○すろむは、山の麓の回りをいふ。○ほぐみは、穂組なり。穂を組み合せ、家の門なごにかけて、神に奉るものなり。○故脚は、下鴨の地をいへるなるべし。○木幡山は、宇治郡高か嶺の北にあり。○伏見の里は、紀伊郡にあり。○鳥羽も、紀伊郡なり。○羽東師は、地名にて、乙訓郡にありといへり。○あゆみ煩ひなしは、足のつかるゝ氣づかひなしとなり。○こゝろざし遠く至るは、遠地に至るとなり。○炭山は、宇治の御室戸山の東北にあたり。○笠取は、宇治郡醍醐山の東にあたり。○岩間は、近江の志賀郡にあり。正法寺といふが、ありて、千手觀音を祭れり。巡禮三十三が所の一なり。○石山も、志賀郡にあり。石山寺は、こゝにあり。○粟津の原も、志賀郡なり。○蟬丸の翁は、仁明天皇の御代の人なり。歌をよくし、琴に妙を得たる人なり。○田上川は、近江の栗太郡、宇治の川上なり。○猿丸大夫は、歌人なり。近江の曾東山にかくれて、ろくに終りきといへり。この人には、いろく説かれど、詳かならず。○家つとは、家へもちかへるなり。○窓の月に

〔解釋〕あからさまはまばしの間なり。○くち葉は朽ちたる葉なり。○おのづから事のたよりは、わざとにあらで、聞くとはなしに、事の便りを聞くとなり。○やむことなきは貴顯なり。○どうなは寄居蟲なり。空なる殻を假りてうの中に縮み入るものなり。○みさごは水邊の鳥にて鷺の類なり。○荒磯は荒き波の打ちよする磯なり。○願はず交らはすは富貴をも願はず、世にも交はらずとなり。

方丈配

〔修辭法〕都の事を引いて、假りの宿りに反形せしめたり。夜ふす床あり、晝居る處あり、一身をやとするに不足なしといひて、假りの宿りのさま、寫し得て妙。どうなを引き、みさごを引くは、同類の事を引きて之れを證せり。この節、名言金語多し、讀まじもの決して輕々にな看給ひる。

すへて世の人の住家を作るならひ、必ずしも身の爲めに  
はせず。或は妻子眷屬の爲めに作り、或は親昵朋友の爲め  
に作る。或は主君師匠及び財寶馬牛の爲めにさへ、これを

第三

作る。我、今、身の爲めに結べり。人の爲めに作らず。ゆゑいか  
むとなれば、今の世のならひ、この身のありさま、ともなふ  
べき人もなく、頼むべきやつともなし。たゞひ廣く作り、  
ども、誰をかやどし、誰をかするむ。四節、我家はわが身の爲めに結  
べるをいふ。これ議論以上五小段この家と附近の地との、吾心にかなひた  
るを叙す。

六

〔解釋〕眷屬眷は願なり。家族のこと。○財寶馬牛は、うれをかざりて入れむと  
て作るなり。○今の世のならひこの身のありさまは、今の世のならひには、  
この身も、この交りをたちたるありさまといはか如し。

段

〔修辭法〕以上の小段は、悉く主として住家の事をいへり。これより以下はす  
べて吾身のことといへり。

この節は再び住家の事を叙するなれども、この處にて住家を叙し終る所  
なれば、力を極めて詳細に、まかも住家の結束とす。

古人を志のびは古の月も今見る月と全しければこの月に對して古人の歌にも詩にもよまれぬるを思ひやるとなり。○猿の聲はいと物悲きものなり。○植木の鳥のかゝり火は山城の久世郡宇治川の西なり。當時はこの所にてかゝりをたきて魚をとれるなれば志かいへり。○山鳥は雉子に似て尾なかし。○ほろくは涙のとぼるゝさまをいふ。行基菩薩の歌に山鳥のほろくどなく聲聞けば父かどぞ思ふ母かどぞ思ふといへるを文中にあやなして志かいへるなるへし。○かせぎは鹿のことなり。○ふくろふの聲は西行の歌に山深みけちかき鳥のおとはせてものおろろしきふくろふの聲といへるにあやなしてかけるなるへし。○深く思ひ云々は深く物を知りたらむ人は山中の觀念これに限らずとなり。

(修辭法)力を極めてこの山中の心になへるを叙す。この人の文のくせとして多くの思想を並べたる文の上には必ずしもしといへるを冠らせたり。前後合せ見るべし。

おほかた此の處に住み初めし時はあからさまと思ひしかど五とせを経たり。假りの菴もやふふる屋となりて軒にばくち葉ふかく土居に苔むせり。おのづから事の便りに都を聞けば此の山にこもり居てのちやむことなき人のかくれ給へるもあまた聞こゆ。ましてその數ならぬたぐひ盡くして之れを知るべからず。たびの炎上に滅びたる家またいくそはくぞ。たゞ假りの庵のみどげくして恐れなしばど狭しといへども夜ふす床あり晝居る座あり。一身をやとするに不足なし。がうなば小さき貝を好む。これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯に居る。則ち人を恐るゝがゆゑなり。我。又た此の如し。身を知り。世を知らば願はず。交はらず。たゞ靜なるを望とし。憂なきを樂とす。三節この家は膝を容るゝ丈ありて却つて心の安きを叙す。

〔解釋〕あからさまはまばしの間なり。○くち葉は朽ちたる葉なり。○おのづから事のたよりははわざとにあらで、聞くとはなしに、事の便りを聞くとなり。○やむことなきは貴顯なり。○ごうなは寄居蟲なり。空なる殻を假りてうの中に縮み入るものなり。○みさごは水邊の鳥にて鷺の類なり。○荒磯は荒き波の打ちよする磯なり。○願はず交らはすは富貴をも願はず、世にも交はらずとなり。

方 丈 記

〔修辭法〕都の事を引いて、假りの宿りに反形せしめたり。夜ふす床あり、晝居る座あり、一身をやとするに不足なしといひて、假りの宿りのさま、寫し得て妙。ごうなを引き、みさごを引くは、同類の事を引きて之れを證せり。この節、名言金語多し、讀まむもの決して輕々にな看給ひ。すへて世の人の住家を作るならひ、必ずしも身の爲めにばせず。或は妻子眷屬の爲めに作り、或は親昵朋友の爲めに作る。或は主君師匠、及び財寶馬牛の爲めにさへ、これを

第 三 大 段

作る。我、今、身の爲めに結べり。人の爲めに作らず。ゆゑいかむとなれば、今の世のならひ、この身のありさま、ともなふべき人もなく、頼むべきやつともなし。たゞひ、廣く作れりども、誰をかやどし、誰をかするむ。四節、我家はわが身の爲めに結べるをいふ。これ議論以上五小段この家と附近の地との、吾心にかなひたるを叙す。

〔解釋〕眷屬眷は屬なり。家族のこと。○財寶馬牛は、それをかさりて入れむとて作るなり。○今の世のならひこの身のありさまは、今の世のならひには、この身も、この交りをたちたるありさまといはか如し。

〔修辭法〕以上の小段は、悉く主として住家の事をいへり。これより以下はすべて吾身のことをいへり。この節は再び住家の事を叙するなれども、この處にて住家を叙し終る所なれば、力を極めて詳細に、まかも住家の結束とす。



今の世の家を作ること、に反形せしめて、我が家を作りしこと、の、これに異なれるを叙す。

うれ人の友たるものは、富めるを貴み、懇なるを先とす。必しも情あると、すなはなるとを、は愛せず。たゞ、絲竹花月を友とせむには、如かず。人の奴たるものは、賞罰の甚きを顧み、恩の厚きを重くす。更らには、ごくみ、あはれふといへども、安く静なるを、は願はず。たゞ、我が身を奴とするには、如かず。一節、わが身を奴とすることの安きを叙す。

方 丈 肥

(解釋) 絲竹は、管絃といへると同じく、琴琵琶の類を絲といひ、笙の類を竹といふ。  
(修辭法) たゞ、絲竹といひたるばかりで、樂器の稱とすなり。元の原質の局部、若くは全部をあげて、元の器の成立せる總稱にかへたるなり。之れを交換法といふ。罰の方はたゞ、附屬したるばかりで、賞の方を主としていふ。緩急と

第 三 大 段

らばむか如し。我身を奴とするには、如かずといひて、下文を引き起せり。もしすべきことあれば、則ちおのづから身を使ふ。たゆみならずしもあるねど、人を従へ、人を顧みるよりは、安し。もし歩くべきことあれば、自ら歩む。苦しといへども、馬鞍牛馬の心をなやますには、似ず。二節、事件をあげて、吾身を奴とすをことの安きを叙す。

(解釋) たゆみならずしもあるねど、は、おのれの手足を使ふには、安かならぬなれどなり。○心をなやますは、人を使ひて、心を苦しむるなり。

(修辭法) 心をなやますといへる下にと、文字を加ふべし。

たゆみならず云々といひ、苦しといへども云々といひ、互に對列したる上に、

て、元の辭に抑揚をもつけたり。  
今、一身を分ちて、二つの用をなす。手の奴、足の乗物、よく我が心にかなへり。心又た身の苦みを知れば、苦むときはや

すめつ。すめなるときは、つかふ。つかふとて、たびく過  
とさず。ものうしとて、心まう。かすことなし。いかに  
はむや、常に歩りき、常に動くは、これ養生なるべし。何ぞ  
たづらにやすみをらむ。人を苦め、人を惱すは、また罪業な  
り。いかゞ他の力をかゝるべき。」三節、事件をわけて、吾身を奴とする  
の安きを叙す。以上六小段、自ら吾身を使役することの却つて心安きを叙  
す。

(解釋)すめは、健康なるなり。上にもあり。○心をうごかすことなしは、心に疑  
ひ懼るゝ所なきゆゑ、自然と動かざるなり。孟子の不心動といへるも、これ  
に同じ。○いかゞ他の力をかゝるべきは、いかで他の力を假らむとの心なり。  
(修辭法)手を奴といひ、足を乗物といひ、うの辭の言ひ廻はし、か比喩し得て  
妙よく我が心になへりといひて、小束。

衣食のたぐひ又た同じ。藤の衣、麻のふすま、得るにまたが

ひて、膚をかくし。野邊のつはな、峯の木の實、命をつぐはか  
りなり。人に交はらざれば、姿を耻つる悔もなし。かてども  
しければ、おろそかなれども、なほ味を甘くす。すべてかや  
うのこと、楽しく富める人に對して、いふにあらず。たゞわが  
身、一つにひとりて、昔と今とをたぐらぶるばかりなり。」一節  
衣食も、わが身に適するばかりなるを叙す。

(解釋)藤の衣は、藤の皮などにて織りたる粗服なり。賤者の衣なり。○麻のふ  
すまは、麻にて作りたる夜具なり。○かては、食物なり。○おろそかなれと云  
々は、粗末なるものなれど、腹がへりぬれば、なほ甘しとなり。

(修辭法)昔と今と云々は、結び得て妙。衣食のたぐひ又た同じといへる句は、  
この節だけの綱領にて、衣を叙する處短く、食を叙する處長し。ともこの  
細目なり。

大かた世を遁れ、身を捨てしより、恨もなく、恐もなく、命は

天運にまかせて惜まず厭はず。身をは浮雲になずらへて、頼まず、またしもせず。一期の樂はうたゝねの枕の上にきばまり。生涯の望はをりくの美景にのこれり。二節世を遁れ身を捨てぬるを叙す。以上七小段衣食とこの身とを叙す。

〔解釋〕惜まず厭はずは好運なれど、之れを惜まず、惡運なれど、之れを厭はずとなり。○またしは、いまだしの約なり。いまだ好運を得ぬと思ふて、この身をくやみもせずとなり。○一期は一生といはむが如し。○うたゝねは、假りねなり。○生涯は、一生を終るまでなり。

〔修辭法〕世を遁れ身を捨てしより恨もなく恐もなしといへる句は、これこの篇の主意安心立命の地もこゝに在り。

一期の樂みは、うたゝねの枕の上にはまりといへる句は、世の盛衰興亡も皆なこれ夢なり。盛なればとて、悦ばず、衰へばとて、悲まず、否却つて之れを一期の自然の樂みとせり。これ長明の悟道。

第三大段

をりくの美景といへる句は、上文の許多の文を收む。

ろれ三界は、たゞ心一つなり。心もし安からずは、牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望みなし。今さびしき住ひ、一軒の庵、自ら之れを愛す。一節三界はたゞ心一つなることを叙す。

〔解釋〕三界は三世なり。過去、現在、未來なり。○心一つなりは、この世の中は、心のあれば萬有も従つて存在することを知るなり。されば心の持ち方一つで、どうともなるなり。華嚴經に、三界唯一心、心外無別法、といへるなり。

〔修辭法〕三界はたゞ心一つなりといひて、主意を一層細分して、之れをいふ。世を遁れ身を捨てぬるも、この心の安ければなりといふ意は、前小段に照らして明白なり。

かのづから都に出でよは、乞食となれることを耻づといへども、歸りてこゝに居るときは、他の俗塵に着することさあはれぶ。もし人、このいへることを疑はゞ、魚鳥の分野

を見よ。魚は水に飽かず。魚にあらざれば、その心を知らず。鳥は林を願ふ。鳥にあらざれば、その心を知らず。閑居の氣味も亦た此の如し。住まずして誰か悟らむ。三節比喻を以て心一つなることを明證す。以上八小段、萬有のすべて、この心に歸することを叙す。

方 丈 記

〔解釋〕乞食は、右に錫杖を掲げ、左に鉢盂を持ちて、食を乞ふものなり。世の乞食の乞食にあらず。○他の俗塵に著することをあはれむとは、他人の世俗の塵に執着するをかはひさふなど思ふなり。○分野は、ありさまなり。○魚にあらざればは、莊子秋水篇にも、この意をのべたり。

〔修辭法〕中間に、魚鳥の比喻をおきて、下に至りて、閑居の氣味に落しこみて、之れを結び、妙。

抑一期の月影傾きて、餘算山の端に近し。忽ちに三途の間に向はむとき、何のわきさかかたむとする。一節餘命幾ほどもなきをいふ。

もなきをいふ。

〔解釋〕抑とは、助辭にて、上を押へ下を起すものなり。○一期の月影傾きては、

わが身の老いて、月影の西山に傾きぬるをいふ。○餘算は、餘命のことなり。

○三途の間は、死後のやみなり。○かこたむは、歎くなり。

〔修辭法〕一期といへるは正意にて、月影といへるは比喻なり。餘算といへる

は正意にて、山の端といへるは比喻なり。これ正喻混合法。

佛の人を教へ給ふおもむきは、事に觸れて、執心なかれどなり。今草の庵を愛するもどが、とす。閑寂に著するも、さしぱりなるべし。いかゞ用なき樂をのべて、空しくあたらし時を過さむ。三節佛の教をとり來りて、前意を翻す。以上九小段、前意を翻す。

〔解釋〕執心は、心を固着せしめて離れぬなり。○いかゞは、いかでなり。

〔修辭法〕事にふれて執心なかれといへるは、前意を翻して、之れを一轉せり。これ翻案法。

第 三 大 段

静かなる曉、このことわりを思ひつゞけて、自ら心に問ひて曰く、世を遁れ、山林に交はるは、心を治め、道を行はむ爲めなり。志かるを、汝が姿はひじりに似て、心は濁りにまめり。住家は、則ち浄名居士の跡をけがせりといへども、たもつどころは、わづかに、周梨槃特が行にだも及はず。もしこの貧賤の報のみづから惱ますか。はたまた妄心のいたりて、くるはせるか。一節、自問を叙す。

〔解釋〕ひじりは、聖僧なり。○濁りにまめりは、名利に執心するをいへり。○浄名居士は、維摩詰のことなり。○周梨槃特、周梨は小の意なり。槃特は釋迦の弟子、極めて愚なるものなりしが、釋迦は遂に之れを悟道せしめたりと、楞嚴經に見ゆ。○貧賤の報は前世に惡因をまきて、現世に貧賤の報を得てなり。○はたまたは、物を分割して一方を見はすときに用ゆ。

〔修辭法〕上文の譯案をうけて、自問を發す。これ長明の謙辭。この謙辭ありて

第三大段

佛門に歸依して、自ら足れりとせざる意、見はれつべし。

その時心更らに答ふることなし。たゞかたばらに舌根をやどひて、不請の念佛三べんを申してやみぬ。時に建曆の二とせ、やよひのつこもりごろ、桑門蓮胤、外山の菴にして、これを志るす。

月かけば、入る山の端も、づらかりき、

たえぬ光りを見るよしもかな。二節、自答を發する能はざりしを叙して上文を結ぶ。以上十小段前意を翻したる意を詳にす。この十小段を合せて三大段、この身とこの住み家との心になへりしを叙して、全篇を結ぶ。

〔解釋〕建曆の二とせは、順徳院御在位の二年なり。○やよひは、陰曆の三月なり。○つこもりは、晦日なり。○桑門は僧のことなり。○蓮胤は長明の法號なり。○歌は長明のにあらず、源季廣の歌にて、後人の入れたるものなりとの

方 丈 記

説あり。その意は、月の影は光りて、四方を照らせども、山の端に入らざるを得ざれば、さすつらからむ、さすればいつも絶ゆる佛の光りをこそ見まほしけれとなり。

(修辭法) 上文悉く力を極めて叙し盡くし、ゆゑこゝはあつさりと叙し去れり。

五小段までは、住家を叙し、六小段以下は人を叙せり。一段終りし跡には、必ず後段の意をふくめて前段後段相接続して、殆んど蠶のまゆを吐きたらむが如し、妙。

方 丈 記 評 釋 終

方丈記奥附

明治廿九年十月九日印刷

同 年 同 月 十 三 日 發 行

同 三 十 年 六 月 九 日 正 再 版 印 刷

同 年 同 月 十 三 日 正 再 版 發 行

定 價 金 拾 五 錢

著 者 中 嶋 幹 事

東京市神田區熊樂町三番地

發 行 者 白 井 練 一

東京市京橋區竹川町十三番地

印 刷 者 石 崎 安 藏

東京市芝區宮本町廿九番地

發 行 所 共 益 商 社 書 店

東京市京橋區竹川町十三番地

印 刷 所 共 益 商 社 印 刷 部

東京市芝區宮本町廿九番地



## 方丈記に對する批評一斑

**陽明學** 評釋者は、中洲門下の秀才、夙に出藍の譽れある人。最も和漢の文學に長じ、殊に文章の結構排置を評し、其の篇章句字を釋く上に於て、一種獨造の技倆あるとは、世の既に普ねく知る所。而して本書亦氏が特詣の眼識手腕を以て、其の組織の要點を發揮し、造語の妙所を標舉すると、例に依りて親切懇到にして、尋常坊間の評釋本とは、全く其撰を異にせる者の如し。世の國文を改めんと欲するの士は、須らく一本を購讀す可し。

**禪學** 國文の評釋を試みたるものは、近世浪華の國學者萩原廣道の源氏物語評釋の外に、絶えて聞かざりしか。今や中島氏、源語評釋に倣ひ、先づ方丈記評釋を著はせり。初めに親切に章句の解釋をなし、次に修辭法を説く。多年斯文に苦勞せる同氏の物せるだけありて、初學の爲めに好き枝折なり。

**女學雜誌** 東京文章專修會主幹中島筑山氏著す所の「方丈記評釋」は、著者得意の技倆を以て、字句の解釋はもとより、修辭文牀の評釋よく、長明の文章の妙致を玩味せしむるに足る。

**教育時論** 日本文學書の解釋は頗多し。然れども、之を修辭の上より觀察して、其文の結構、其字句の運用を評騰せるものは極めて尠し。本書は和漢文に通せりと云ふ中島氏が、國文書の

解釋中、修辭的眼光を以て觀察したるものなきを慨きて著はされたるもの。先づ初めに方丈記の著者鴨長明と文章との關係、方丈記の文體を叙し、次に本文は移り、之を解釋し、之を批評し、讀者をして其書の眞味を理解せしむ。蓋し好著と謂ふべし。

### 女鑑

鴨の長明の方丈記を文章の上より評釋せるものなり。かゝるものゝまれなる世の中にいとよき企なり。あたれりやあたらずやは、しらす。文章に志あつからん人は、まづ見てよ。評釋せるは中島幹事。

### 國學院雜誌

中島筑山氏の著す所、著者の緒言にいはいく、國文の解釋の多きことは斗にて量り、帯にて掃はんばかりなれど、修辭的眼光を放ちて觀察したるものとは、晨天の星と一般絶えて無くして僅に有る者は、萩原廣道の源氏物語評釋なりけり。これさへ初の巻のみにて終局を見ず。文學上歎はしき限ならずや。己れ自ら力のほさを揣らねど、國文の數々をつぎつぎに修辭的に説き明さん。と以て其の所思を窺ふに足るべし。即氏は自己の批評眼を放ちて、中古文學書類の文學的品階を試みんと欲するもの、語句文章の註釋以外、歩武を此の難點まで進められたるは甚喜ぶべきことなり。本書の如きも若首まづ「作者と文章との關係」「全編の結構」「文の形体」等の章を設けて細論する所あり。この方丈記なる者は脈絡貫通せる一篇の議論文にして、三大段に分れ、中間の敘事の一段の如きは前後の所論を確むる引例なりといへる。本篇は漢文

の骨組を學びたる者にして、蘇氏の前赤壁賦陶靖節の歸去來辭と構造を同じうせりとせらる。共に一種の所見なりといふべし。本文に入りては解釋と修辭法とに分ちて、難解の字句と修辭上の價值とを詳説せり。氏はもと漢學者にしてまた國文に精しき者、その修辭文法を説くや、往々文章軌範の講義を聞く如き感なきに非ず。大段中小段を分ち、小段を細分して更に節となす。吾人其の分析力に服すると同時に、あまりに文章を截斷して無味の者とならしめざるかとの疑なきこと能はず。

### 拙著方丈記評釋の批評に就いて 國學院雜誌記者に教を乞ふ

中島 筑山

國學院雜誌第三卷第二號に於いて拙著方丈記評釋を批評せられたるは、余の深く謝する所なり。されどその末尾にはれたる文意は、余が愚昧なる、聊か解しかぬる所あれば、同雜誌記者よ、その煩を厭はで啓沃の勞を執られなば、余の幸榮之に如かじ。その末尾に云く『その修辭文法を説くや、往々文章軌範の講義を聞く如き感なきに非ず。大段中小段を分ち、小段を細分して更らに節となす。吾人其の分析力に服すると同時にあまりに文章を截斷して無味の者とならしめたるかとの疑なきこと能はず』と。さて第一に文章軌範の講義を聞く如しとて、之れをはねら



れたり。されど文章軌範は一定不變の説き方あるにや。よしあるならば、なせそれが悪きや。余は殆ど記者の示教に惑ふものなり。凡そ支那にても又た日本にても漢文の粹を集めて、一時の流行を極めつるものは文章軌範に如くものなかるべし。中には議すべきものなきにあらざれど、要するに名高き文の多きに居る。且つ古今の碩學鴻儒も最も力を、この批評に盡したるものあり。中には陳套なる説なきにしもあらねど、要するに巧妙なる修辭的の評論多し。近來西洋の學術入りてより始めて修辭を秩序的に説くものあれど、その以前に在りて、その材料として看破されたるもの、創説せられたるもの極めて多し。取り以て修辭學の料とすべしものあり。さるに翻つてわか國文界を觀れば、かゝる眼光を放ちて批評したるもの、少きはいかに。學者のこゝに冷淡なるか、抑々又た文章軌範の講義を聞くか如きと排斥する記者の人の聲に驚きて然るか。されど余はわか國文の數々を、巧妙に、精確に、修辭的より文章軌範を講義したらむか如きものなきを恨むるのみ。又た余の節段を分つは、物すさにて然かするにあらず。全く大主意の在る所を明確ならしめむか爲めなり。大主意だに明確ならば、その趣味も十分に見はれつべし。從來の國文學者には、方丈記を全く隨筆体にして、一篇々々に單立したるやう説くものあれど、余は全く一篇の首尾ある文として説けり。さては文章を截斷したりとは、從來の國文學者の説

の智識は、全く國學院雜誌記者の後輩なり。いざこれより謹みて教を吾先輩の前に仰かむ。

### 國學院雜誌

『中島筑山氏に答ふ』吾人が、本誌第三卷第二に於いて、中島筑山氏の『方丈

記評釋』を批評して「その修辭文法を説くや、往々文章軌範の講義を聞く如き感なきに非ず。大段中小段を分ち、小段を細分して更に節となす、吾人その分析力に服すると同時に、あまり文章を截斷して、無意の者とならしめざるかとの疑なきこと能はず。」といひしを反問して曰はく、文章軌範に一定不變の説き方あるにやと。答へていはく、文章軌範の一定不變の説き方あるや否やは、漢學者なる氏のむしろ明知せらるゝ所なるべし。又問うて曰はく、「よしあるならば、なせそれが悪きや」と。答へて曰はく、文章軌範云々の事は、記者が偶感にいづ、偶感なるが故に、その當れりや當らずやは、見る人の目によりて、れのづから異なるべし。さればその問答より善惡の判断を附せず。況んや「はねられたり」などは、寧氏が邪推にして記者の知らざる所なり。以下に於いては、氏が自著の効能を述べ立て、從來の國學者の着眼せざりし點に論及せるをいへり。誠に然り。然るが故に、吾人も亦「氏は自己の批評眼を放ちて、中古文學書類の文學的品騰を試みんと欲する者、語句文章の註釋以外、歩武をこの難點まで進められたるは甚喜ぶべき事なり」といひ、又氏が方丈記を以て、一編の論文なりといへりしをも、漢文の骨組を學びたるも

のにて、蘇氏の前赤壁賦陶靖節の歸去來辭と構造を同じうせりといへるをも、一種の所見として特記せしに非ずや。又時文欄評論の時代の條下にねいても、「從來の國學者は、古文字書類に向つて出來得るだけの研究を盡せり。然れども、これは字句の註釋のみに止まれり。今の時に當りても、なほこの後をつぎ、徒に字句の註釋のみを云々するは非なり。吾人は、寧是等の人の、進みて文學的研究を遂げ、審美的評論を公にせられんことを切望するものなり。近時中島筑山氏『方丈記註釋』を著し、大にこの書の文學的價値を研究せんと企てたり。而してこれは專修辭の一方に精しきのみにして、未吾人の意を満足せしむるに足らずと雖、亦吾人はかゝる研究に着眼せられしを多しとす」といひ、以て一般國學者を警醒すると同時に、貴著に好意を表せり、吾人不佞にして、貴著に對し隨喜の涙を垂るゝ能はざりきと雖も、この價値だけは充分に觀取して、之を筆にせしを覺ゆ。而して隨喜せざりしは何によるか。未完全無欠なりと推服するに至らざりしが爲なり。この分解巧は即巧なれども、又は只初學者に文章を教ふる時、或は文章を解し易からしめん爲の一方便に過ぎず。いはゞ一つの見方なりとも素より無用の事には非ざるべけれど、只單に是のみによりて、この書の文學的價値を發揮し得と思ふは非也。何となれば、この時代に於ける、或は文學史上に於けるこの書の價値を判せんには是非とも比較的研究、或は歴史的研究によらざるべからざればなり。これは評論の時代中にも纒陳せる所、誰しも異議はなかるべし、

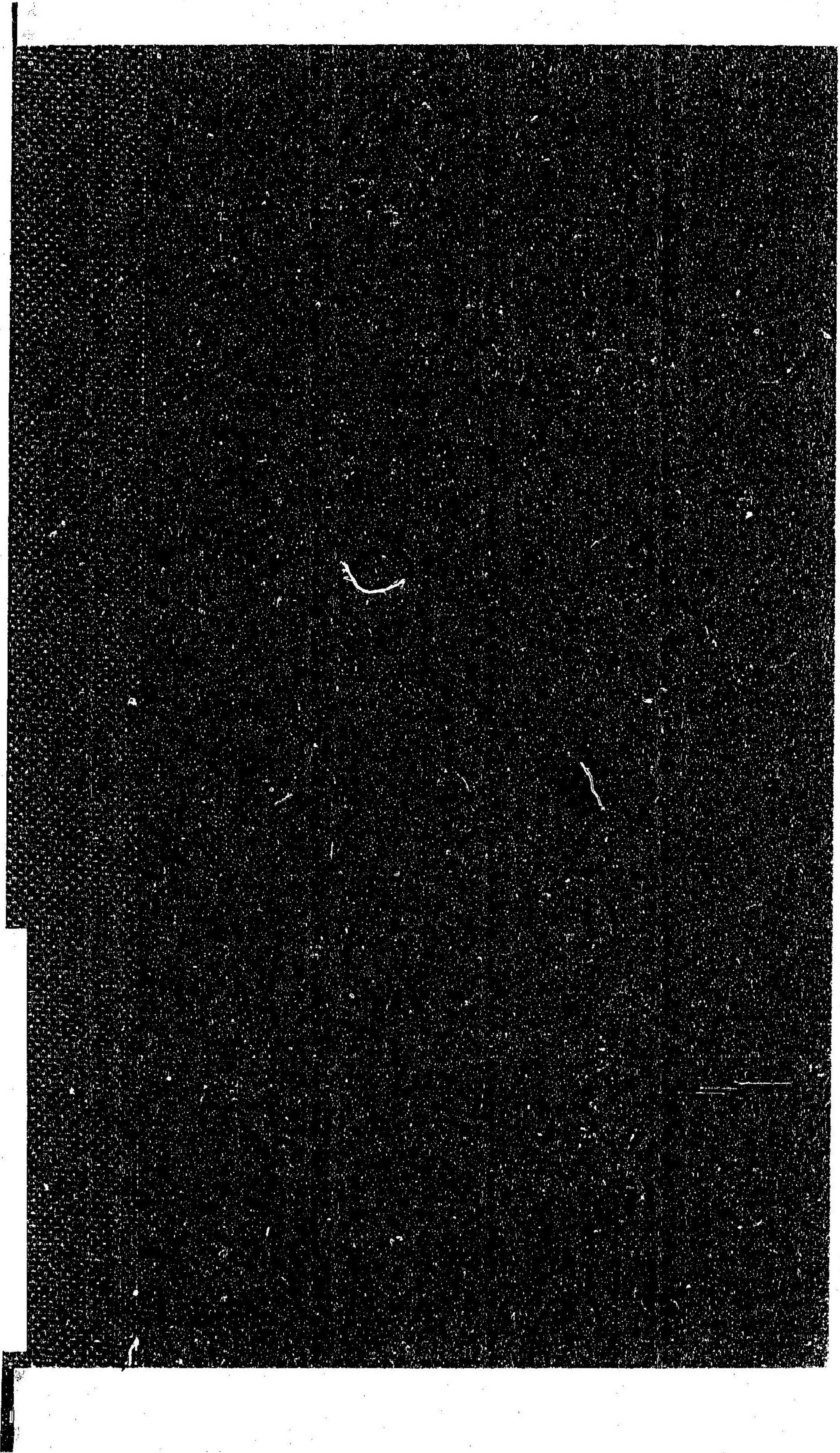
氏は彼の文をいかに見つる。而して吾人か立論の主意とする所は、只氏の方丈記がこれに輕く彼に重かりしを責むるのみに非ず、方丈記の如きは、素より片々たる小冊子、之に向つて歴史的研究或は比較研究とは、ちと過大なるに相違なし。然れども、氏の方丈記は、日本文學の第一著として出されたるもの、之については更に大部なる更に貴重なる文學書類に及ばるゝならんを思ひ、又氏ならぬ人も大にさる方の評論に着手せられん事を希望するが故に、いさゝか微意を述べて、大方に訴へしなり、かの二文を對照玩味せられなば、記者の意はおのづから明亮ならん。さるにても、なほ比較的研究、或は歴史的研究を退け、只段落を分ちて、この各段に於ける修辭を説くのみにて充分なりといはゞ、吾人は全く氏と意見を同じうすること能はざる者なり。

2195.54

DR  
1/11/71  
1/11/71  
A

50

J. J. 12. 1. 13



19

564

Ⓜ

日本  
文学 方丈記評釈

国立国会図書館

081942-000-1

19-564

方丈記評釈

中島 筑山/著

M30

DAC-6931



